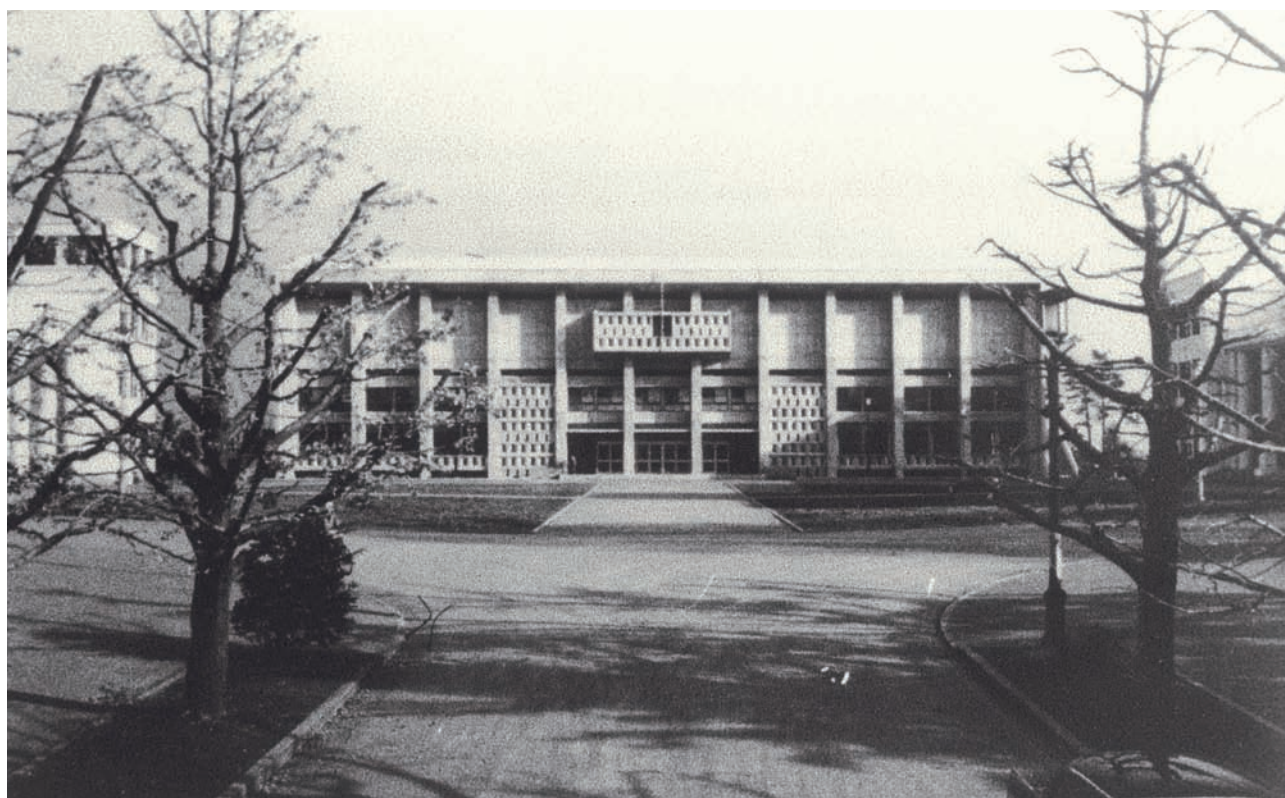


2017年度 慶應義塾大学体育研究所 活動報告書

特集：記念館に想いを寄せて

Appendix. 東京2020大会に向けた取り組み

『KEIO 2020 project 2017年度活動報告』



目 次

「巻 頭 言」 所長 石手 靖	1
I. 特集 記念館に想いを寄せて	3
1. 記念館のウラ (加藤幸司)	
2. 夏は暖房、冬は冷房、そして雨漏り：旧記念館の思い出 (加藤大仁)	
3. 威風堂々 (佐々木玲子)	
4. 日吉記念館によせて (永田直也)	
5. 記念館のある風景 (野口和行)	
6. 日吉記念館の再建を機に (村山光義)	
7. 旧記念館の思い出と新記念館への期待 (山内 賢)	
II. 研究活動記録 (研究委員会)	
1. 個人研究業績・研究教育活動・研究助成	11
2. 所内定例研究会発表要旨	25
3. 大学体育連合中央研修会参加報告	34
4. 浅野・所内・学事・小泉基金報告書	37
III. 教育活動記録	
III-1. 授業の実施 (教育委員会)	
1. 2017年度体育科目の履修者統計	47
2. 授業評価の実施	51
3. 通信教育対象科目	59
4. 塾内における授業担当	60
III-2. スポーツイベントの開催 (スポーツ振興委員会)	
1. 塾長杯・塾内競技大会	61
2. 公開講座	63
3. 所内施設の解放	64
III-3. 他機関との連携	
1. 公開講座	65
2. 一貫校連携	65
3. 体育会支援	65
IV. 業務活動記録 (千葉徹主事)	69
Appendix. 東京2020大会に向けた取り組み『KEIO 2020 project 2017年度活動報告』	73

巻 頭 言

大学体育研究所

所 長 石 手 靖

この度、2017年度慶應義塾大学体育研究所活動報告書を発行することができました。この一年間、実施してまいりました体育研究所の研究、教育、スポーツ振興の各活動をここにご紹介させていただきます。まずは、様々な活動の実施に際し、所員はじめ、数多くの方々のご支援ご協力を賜りました。この場をお借りしまして、関係の皆様に対し厚く御礼申し上げます。

さて、今年度初めに日吉記念館の建て替え計画が決定し、2017年11月より取り壊し工事が始まりました。今年度の秋学期は、そこで実施していた授業にも影響が出たわけです。日吉記念館は、慶應義塾における「講堂」であると共に「体育館」でもあり、体育研究所とは深い関わりがあるわけです。そこで日吉記念館について少々触れたいと思います。

日吉記念館は、慶應義塾創立100年記念建設事業の一環として、昭和33年（1958年）3月着工、同年10月に完成しました。鉄骨鉄筋コンクリート造り、地上3階、地下1階建て。式典では6,500人収容です。昭和33年11月8日の義塾創立100年記念式典の会場にもなりました。以来、大学の卒業式や入学式、秋の連合三田会や三田祭前夜祭コンサートなど大きな式典が実施されてきました。また、日常には、体育研究所の体育実技授業の実施場所として1時限から3時限まで（9:00～14:30）使用しました。アリーナにおいて、バスケットボール、バドミントン、バレーボール、ハンドボール、フットサル、1階北控室においては、気功を実施し、多くの塾生の運動の場となっていました。また、一般学生向けスポーツ大会の塾長杯バスケットボール、バレーボール、フットサルの各大会でも使用しました。授業後は、体育会の練習利用となり、アリーナでは、主に体育会3部（バスケットボール部、バドミントン部、バレーボール部）の練習場となり、奥の階段の踊り場を利用して体育会重量挙げ部も活動しました。その他、週末には、体育会各部の試合会場としても多く利用された他、ステージや北控室では、公認学生団体がダンス等の練習場として利用しており、かなり過密な使用状況となっていたことは間違いありません。

その日吉記念館も大掛かりな耐震補強や屋根葺き替えの工事、アリーナ面改修工事などを施したものの老朽化には勝てず、強大な屋根からの雨漏りは、度々授業実施の妨げにもなりました。回転式で開閉する南北ガラス窓も可動する箇所は極わずかで室温調整が出来なくなり運動環境としては相応しくない状況がしばしば見られました。内部天井に張った落下物防止ネットにも埃がたまり照度も不足していました。

新しい日吉記念館は、2020年3月竣工を目指すもので、地上5階、地下1階建てとなり、収容人員が約1万人、アリーナ面積の拡大し体育施設としての充実も図られる予定です。2020年は東京オリンピック・パラリンピック開催の年であり、また、それに先立ち英国オリンピック委員会の事前キャンプの実施も予定されています。新しい日吉記念館の完成を心より期待しております。

I. 特集：記念館に想いを寄せて

記念館は、慶應義塾創立百年記念事業のひとつとして建築された（1958年3月着工、1958年11月竣工）。下の写真は、1994年当時、体育科目履修のために記念館前にできた長蛇の列である。時に記念式典や催し物として、時に体育の授業として、様々な使用用途から多種多様な思い出を塾生・塾員に刻んできた記念館は、2018年初頭、その長い歴史に幕を下ろした。体育研究所はこれまでの歴史の中で、体育科目の多くを記念館で実施してきた。今年度の活動報告書では、塾生・塾員とはまた異なる視点で記念館への想いを寄せるべく、体育実技を記念館で行ってきた“教員”の立場からそれぞれの想いを綴る。

【文責】稲見崇孝



1. 記念館のウラ 加藤幸司
2. 夏は暖房、冬は冷房、そして雨漏り：旧記念館の思い出 加藤大仁
3. 威風堂々 佐々木玲子
4. 日吉記念館によせて 永田直也
5. 記念館のある風景 野口和行
6. 日吉記念館の再建を機に 村山光義
7. 旧記念館の思い出と新記念館への期待 山内 賢

記念館のウラ

加藤幸司

体育研究所（スポーツ棟）の3階から様々な遠景が臨める。二月ほど前（4月頃）から特に目を惹くのが、南側階段踊り場から見えるMM21（みなとみらい21）の夜景である。ランドマーク、インターコンチ、パンパシそしてベイブリッジまで。スポーツ棟に入居して以来、初めて見えたものだ。こんな眺めが広がったのはなぜか？あったものがなくなったから。障害物？いや、そう言っては申し訳ない。そう、記念館が解体されたのだ。

そこにあった記念館におけるわたしの居場所、それは建物の外にあった。記念館の裏、崖に面した東側のごく狭い場所である。そこで目に入るものはテニスコートと木々の緑。当時（昭和53年頃）はまだ樹木の背がそれほど高くなかったため蝮谷のテニスコートがよく見えた。そして耳に入るのは鳥の鳴き声とテニスボールを打ち合う乾いた音だけだ。学生時代、いつもその小空間で練習前のひとときを過ごした。記念館を支える太い斜めに走った石の柱に身を横たえ思索し、ときに物思いに耽った。そこでは不快な刺激に触れることがなかった。だから身体の実感性が自然と高められ次の練習に向かうことを容易にしてくれた。そこへ身を置くと間違いなく身体の実感度が上がっていたように思う。その場所は、春夏秋冬わたしを支えてくれた隠れ家的な空間であった。そこは紛れもなく記念館が創り出した空間であり、わたしにとって記念館そのものであった。そして今、その記念館はもうない。

夏は暖房、冬は冷房、そして雨漏り： 旧記念館の思い出

加藤大仁

学部生時代には練習場所、大学教員になってからは実技授業実施場所として利用してきた記念館が建て替えられることになった。解体工事が一段落したのだろうか、体育研究所2階の窓越しに記念館があった場所を眺めると、土が剥き出しとなって赤茶けた敷地と、その背後にある蝮谷雑木林の新緑が鮮やかなコントラストを作り出している。今更ながら、この場所で30年以上も活動してきたのかと思うと、感慨深いものがある。

大学に入学した当時を振り返っても、記念館のコートは既にボロボロ。油の匂いが漂う古い列車の床板のような雰囲気を出しており、ドリブルするだけでボールが黒ずんできた。そのため、練習前には丹念に床掃除すること、ボールを磨くことが、1年生に課された重要な仕事だった。

そもそも中学、高校時代を通じてボールを磨いたことなどなく、この話を他大学のバスケットボール部員にしても、「何だそれ？」と言われるのがオチだった。加えて、天井からムカデやヤスデ、ゲジゲジの類が舞い降りてくることもしばしば。毎度のこととはいえ、これに慣れることはなかった。

その後フロアが張り替えられ、バスケットゴールが新しくなったのを見届けて大学を卒業したのだが、数年後体育研究所の教員として記念館に戻ってくると、今度は梅雨時の湿気や夏の暑さ、冬の寒さに悩まされるようになった。

地球温暖化の影響なのか、それとも記念館固有の問題なのかは分からないが、とにかく夏の暑さは驚異的。窓の開閉すらままならなくなった90年代後半以降は、ガイダンスの際「記念館には夏の暖房、冬の冷房が完備している」と説明するのが恒例となった。更には

屋根や天井部の老朽化に伴う雨漏りも激しくなり、天井板の破片がパラパラと落下してくることも度々だった。

こうなると、天候次第で実技実施を諦めざるを得ない。いつのことかは定かでないが、「雨のため講義に変更する」とアナウンスしたら、学生に「これって室内種目ですよ？」と訊かれたことを覚えている。そこで、「学費を上げれば何とかなるんじゃないの？」と答えておいた。

暫くして、慶應義塾創立150年の事業の一環として記念館を建て替えるとの方針が示された。これで室内競技にも関わらず、雨天時は実技中止といった惨状からは逃れられると思ったのも束の間、リーマンショックの影響により塾の財政状況が悪化。記念館の建て替え計画も延期されてしまった。それから約10年、記念館建て替え事業の再開が発表され、現在に至っている訳である。

旧記念館では、ことある毎に建物の老朽化に伴う不具合がクローズアップされたが、新たな記念館ではこの手の問題に悩まされることはなくなるはずだ。その一方で、新たな記念館をどのように利用していくのか、これまで以上に真剣に考える必要があるのではないか。勝手気儘なラインテープの貼付やフロアに水分補給用のボトルを置くこと等、旧記念館では許されてきたことも、新たな記念館での活動を始めるに当たって再度検討する必要があるだろう。さもないと、新たな記念館も直ぐに古びたものになってしまうに違いない。

新たな記念館が、末永く使い勝手の良いものになることを願っている。

威風堂々

佐々木玲子

日吉記念館は、銀杏並木のまっすぐに伸びた緩やかなスロープの突き当たりに堂々とした姿でいつも私たちを受け止めていた。その厳かな外観を呈する中に一步踏み込めば、そこは学生たちが賑やかに集いスポーツを楽しみ、その活気を大きく包み込む懐の深い空間だった。学生たちの様々な日常をじっと眺め見守ってきてくれたように思う。その姿がちょうど跡形も無くなっている状態の今この間に、少し昔を思い出してみたい。

体育が必修科目だった記憶も今や昔。毎年年度の始めと終わりの数回は、400名余りの実技履修生が一堂に集まりフロアいっぱいを使って体力測定や合同での体操を行っていた。その様子は実に壮観なものだった。また、当時の体育実技は男女別。担当していたクラスの一つ、女子60人ほどのダンスの授業が行われていたのもこの記念館の一画で、男子がバスケットボールをやっているすぐ隣だった。一斉に響き渡るドリブルの音、押し寄せるような足音、甲高いホイッスル。その隣でそれに負けじとプレーヤーから流れるダンス音楽にマイクの声。思えば凄まじい光景である。記念館の一見冷たそうなコンクリートの壁や高い天井は、こんな空間の賑わいをどのように眺めていただろう。

記念館は元来スポーツ施設としての使用が第一目的の建物ではないと聞かすが、そこにフロアが広がり学生たちが様々な形でスポーツを楽しめる快適な環境は日吉キャンパスには欠くことができない。銀杏並木の突き当りに日吉キャンパスのシンボルとして、再び、威風堂々とその姿を現す日をわくわくしながら心待ちにしている。

日吉記念館によせて

永田直也

私が日吉記念館に初めて入ったのは、入職した平成24(2012)年の入学式である。先輩所員に連れられて入学式を見学に行ったのだが、その歴史を感じる内観に驚きを感じたことを覚えている。木材の質感、壁のコンクリート、窓枠、ステンドグラス、ステージ等、私にとって書籍でしか知らなかった慶應義塾の歴史を最も始めに感じた瞬間であった。それ以降、授業やスポーツ大会等の各種イベントでキャンパス内の体育施設を使用したことが、私がバスケットボール担当教員であったこともあり、日吉記念館は最も義塾らしい施設であり、親しみのある施設となった。時には、その歴史ある建物であるが故に、アクシデントに悩まされることが多々あった。しかし、そのようなことがあっても変わらずあり続ける日吉記念館を毎日見ることは、義塾で勤務している証でもあった。新しく生まれ変わる日吉記念館は、私にとって、またその他の多くの人にとっても、旧日吉記念館のように慶應義塾を感じさせてくれる施設であってほしい。

記念館のある風景

野口和行

入職して初めて入った日吉記念館の最初の印象は「とにかく広い」ことであった。正面から入ったときに、足元に広がるフロアの広さと高い天井、そして背後にそびえる観客席に圧倒された。記念館で主にバレーボールの授業を担当することになって、その広さと高さが必ずしも授業のしやすさにつながらないということはあったが、多くの学生たちと記念館で出会い、楽しい思い出を刻むことができた。

記念館にまつわる風景で忘れられないものがいくつかある。ひとつは、入学式や卒業式、連合三田会などのときに見せる祝祭の場としての華やかな風景である。そしてもう一つは、体育研究所が主催する塾長杯スポーツ大会のときに見られるスポーツを愛する学生たちの集いの場としての風景である。スポーツ振興委員のときには集合写真を観客席から撮影することが多かったが、カメラのファインダー越しに見える学生たちの笑顔がとても好きであった。

スポーツ棟の階段から見えた記念館は、今は跡形もなく、上り下りするたびに少し寂しさを感じる。しかし、これからは日を追うごとに新しい記念館が立ち上がっていく風景に変わっていくのだろう。2020年に竣工する新しい記念館の姿を想像しながら、楽しみに待ちたい。

日吉記念館の再建を機に

村山光義

私が慶應義塾大学で教鞭をとることとなったのは1992年(平成4年)のことでした。当時、保健体育科目は全学部必修で実施されており、週1回の共通クラスで実施される「基本体育」の実技のうち、私の主な担当はバレーボールでした。バレーボールは屋外コートで実施していましたが、4月冒頭にまず「体力測定」と「合同体操」というプログラムが全クラス合同で日吉記念館にて行われました。合同体操では、およそ400人の学生がフロアでステージ上の教員の指示のもと徒手体操を行う様子を、後ろのスタンドから見ていたことを思い出します。まさに慶應義塾の体育の歴史と伝統を体感した瞬間でした。しかし、大学設置基準の大綱化によるカリキュラム改定が行われ、この年を最後に、保健体育科目は選択科目に移行しました。結果的にこの合同体操や体力測定(プールの一斉水泳・塾生皆泳も)の最後を見届けることとなりました。その後、新たな体育カリキュラムも自分の慶應義塾生活も四半世紀以上の日々を重ね、この間体育実技のバレーボールやインドアスポーツ、体育会女子バレーボールの指導等で日吉記念館に立ちました。2020年の新生日吉記念館誕生を機に、自分の大学体育教員としての志を再確認し、また未来に向けて進化したと思います。

旧記念館の思い出と新記念館への期待

山内 賢

思い起こせば1990年、私は慶應大学の助教(当時の職名は専任助手)としての勤務がスタートしました。当時の体育科目は必修であり、今よりも多くの履修者が旧記念館で体育実技を楽しんでいました(当時の主担当種目はバスケットボール)。実技種目の中には合同体操という全ての履修者に共通の実技種目があり、マット運動や大きなロイター版(スプリングボードという名称であったような…)を踏み切る跳び箱にチャレンジして、「走・跳・空間姿勢の調整」を意図した全身鍛錬の課題に、履修者が必死にチャレンジする身体活動もありました。旧記念館には肋木が設置されていて、健康体育教育の現場の雰囲気であふれていたようにも思えました。当時の実技種目は、バスケットボール、バレーボールだけでした。時は流れ体育科目が選択となり、旧記念館から肋木が撤去され、いろいろな球技種目が導入されると、その空間は履修生の笑顔と歓声で奏でるスポーツの現場へと変わっていきました。そしてハンドボールも種目導入されて、私が担当しました。とはいえ旧記念館は、式典講堂のデザインが主目的であり、身体活動の場に代償して活用していたので、雨の日は湿気でスケート場のように「つるつる」で危険な運動現場になりました。授業内容を工夫した記憶が蘇ります。そして、旧記念館は晩年に、タラフレックス素材に変更され、フロア環境の改善がなされました。安全確保のあらわれです。このたび、記念館が生まれ変わり、設計においては、体育教員・体育会部員の要望も導入される模様です。新記念館には、式典とスポーツ現場の融合を目的とした人間教育が期待できる身体知の聖地になることを切に望みます。

Ⅱ. 研究活動記録

(研究委員会)

1. 個人研究業績・教育業績・研究助成

石手 靖 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(報告書)

- ・石手靖, 鳥海崇, 坂井利彰, 加藤幸司, 須田芳正, 吉田泰将, 山内賢, “学生のスポーツ行動と大学におけるスポーツ「研究を通じた塾体育会の支援策～統計手法を用いた競技力推定～”, 慶應義塾大学体育研究所2017年度基盤研究レポート, 慶應義塾大学体育研究所: 4-5, 2018.

学会発表等

- ・石手靖, “種目別学会の意義について ―文化としてのバレーボールの発展に向けて―”, 日本体育学会第68回大会ランチョンセミナー (静岡大学, 静岡), 2017.9.9.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・日本バレーボール学会理事長
- ・日本レーザー・スポーツ医科学学会理事
- ・横浜ビーチバレーボール連盟理事
- ・かながわパラスポーツ普及推進検討会委員

研究助成等

- ・“スポーツを通じた身体知・障害理解教育プログラムの開発・改善と KEIO フットサルアドベンチャー2017の開催”, 調整予算(日吉)プロジェクト事業, 45.8万円.

近藤 明彦 【教授】

学会発表等

- ・永田直也, 山内賢, 佐々木玲子, 加藤大仁, 近藤明彦, “大学教養体育における教師の指導・関わりが履修者のスポーツ活動に対する動機づけに及ぼす影響”, 東京体育学会第9回大会, 東京, 2018年3月.
- ・Kondo, A., Kemper, R. Social attitude and value in sport -comparative study between German and Japanese youth athletes. ISSP 14th world Congress, Sevilla, 2017.7.10-14.

佐々木玲子 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・佐々木玲子, “身体能力の発達からみた運動の至適時期”, 子どもと発育発達, 15-1: 4-11, 2017.
- ・田中千晶, 引原有輝, 佐々木玲子, 安藤貴史, 仲立貴, 薄井登誉子, 田中茂穂, “幼児の基本的動作様式の質的評価とその量的パフォーマンスとの関係”, 発育発達研究, 76: 8-15, 2017

(執筆)

- ・佐々木玲子, “普段から様々な形で体を動かすことで, 1日60分以上の身体活動を行えるようにしましょう”, ふくしまっ子運動指針, ふくしまっ子体力向上総合プロジェクト支援委員会体力向上チーム, 福島県教育庁健康教育課: 2-5, 2018.

(報告書)

- ・佐々木玲子, “身体の発育段階に応じた運動指導の重要性～適切な運動実施のために～”, 平成29年度 運動部活動の在り方に関する調査研究事業 運動部活動に関するスポーツ医・科学的調査研究(スポーツ庁委託事業) 調査報告書, 財団法人日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会: 27-47, 2018

(取材協力)

- ・佐々木玲子, “動くの嫌! 汗はちょっと! そんな子どもや女子にも“ACP 的考え方””, Sports Japan : 24-25, 2018.

学会発表等

- ・Sasaki Reiko, Ishizawa Junko, “Developmental study of fundamental movement among preschool children playing hopscotch”, 22th annual Congress of the European College of Sport Science, Germany, 2017.7.5-8
- ・Ishizawa Junko, Sasaki Reiko, Yoshitake Yutaka, “The time spent on physical activity by preschool children on weekends -Comparison between active and inactive children-”, 22th annual Congress of the European College of Sport Science, Germany, 2017.7.5-8
- ・佐々木玲子, 石沢順子, “観察的評価による幼児のケンケンパ跳び動作の習熟度と発達特性”, 第68回日本体育学会, 静岡県, 2017年9月8-10日
- ・石沢順子, 佐々木玲子, 吉武裕, “身体活動量からみた親子の活動パターンについて”, 第68回日本体育学会, 静岡県, 2017年9月8-10日
- ・佐々木玲子, 石沢順子, “幼児の自由遊び中にみられる動きの多様性とその個人差”, 第14回子ども学会議(日本子ども学会学術集会), 環太平洋大学(岡山), 2017年10月21-22日
- ・石沢順子, 佐々木玲子, “運動・スポーツ系の習いごとと幼児の日常身体活動量の関係”, 第14回子ども学会議(日本子ども学会学術集会), 環太平洋大学(岡山), 2017年10月21-22日
- ・稲見崇孝, 佐々木玲子, 村山光義, 宮川博文, 井上雅之, “スポーツ障害の予防に関するアンケート調査 一・中学生スポーツ選手の保護者を対象として一第1報”, 第16回日本発育発達学会, 明治大学(東京), 2018年3月10-11日
- ・永田直也, 山内賢, 佐々木玲子, 加藤大仁, 近藤明彦, “大学教養体育における教師の指導・関わりが履修者のスポーツ活動に対する動機づけに及ぼす影響”, 第9回東京体育学会, 東京, 2018年3月11日.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・佐々木玲子, “幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム～理論編～”, 幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム普及講習会, 新潟市, 11月, 小田原市, 1月.
- ・佐々木玲子, “幼少年期の動作の発達”, 幼少年体育指導士認定講座, 港区, 8月, 札幌市, 10月, 名古屋市, 11月
- ・佐々木玲子, “子ども基本的運動能力を運動遊びとして考える”, カラダづくり運動プレイリーダー養成講座, 横浜市, 8月
- ・佐々木玲子, “動きの発達とスキルの獲得”, すぎなみスポーツアカデミー指導員養成講習会, 杉並区, 9月

(社会的活動・役職)

- ・日本学術会議連携会員(第24期)
- ・日本体育学会理事
- ・東京体育学会常任理事
- ・日本子ども学会理事
- ・比較舞踊学会副会長
- ・横浜市スポーツ推進審議会委員(第24期)
- ・日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会委員
- ・日本体育協会指導者育成専門委員会委員
- ・財団法人健康・体力づくり事業財団 全国ご当地体操実態調査委員会委員
- ・ふくしまっ子体力向上総合プロジェクト支援委員会委員

研究助成等

- ・“幼児におけるリズムカルな協応動作の発達～マルチタスク動作に着目して”, 科学研究費助成金, (16K01884), 100万円.

植田 史生 【教授】

学会発表等

村山光義, 石手靖, 植田史生, 須田芳正, 福士徳文, “スポーツ科学分野の LLLT・LEDT 研究トピック2017”, 第21回日本レーザー・スポーツ医科学学会, 東京, 2017.11.18

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・日本レーザー・スポーツ医科学学会理事
- ・ハーヴァード大学剣道部ヘッドコーチ、ライフタイムディレクター

当年中の研究教育活動の概要

スポーツ科学分野の LLLT・LEDT における文献研究を行った。

村山 光義 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・野口和行, 村山光義, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子, “シーズンスポーツ「アウトドアレクリエーション」受講者のライフスキルの獲得：ふりかえりの記述による質的検討”, 体育研究所紀要, 57巻1号：19-31, 2018.1
- ・村山光義, “筋疲労改善に対する LLLT・LEDT の効果”, 日本レーザー医学会誌, 38巻4号：432-438, 2018.3

学会発表等

- ・村山光義, “筋損傷および遅発性筋痛の軽減に対する LLLT および LEDT の効果”, 第29回日本レーザー治療学会：日本レーザー治療学会誌 Vol.16：50, 東京, 2017.6.24
- ・Murayama M, Nosaka K, Inami T, Shima N, Yoneda T, “Optimum portion of force-displacement curve to assess muscle hardness with a push-in meter”, 22th Annual congress of the European College of Sport Science, Essen (Germany), 2017.7.7
- ・Inami T, Murayama M, Shima N, Nosaka K, “Changes in biceps brachii muscle hardness assessed by ultrasound strain elastography after eccentric exercise of the elbow flexors” 22th Annual congress of the European College of Sport Science, Essen (Germany), 2017.7.7
- ・Shima N, Murayama M, Inami T, Nosaka K, “Biceps brachii mechanomyographic and electromyographic activity changes after eccentric exercise of the elbow flexors” 22th Annual congress of the European College of Sport Science, Essen (Germany), 2017.7.7
- ・村山光義, 稲見崇孝, 宮川博文, 内山孝憲, 米田継武, “押圧法による上腕二頭筋と上腕筋の筋硬度分離評価” 第71回日本体力医学会：Journal of Physical Fitness and Sports Medicine Vol.6 (6)：545, 松山, 2017.9.14
- ・稲見崇孝, 村山光義, 宮川博文, “マッサージ後に生じる腓腹筋 stiffness 変化の定量化” 第28回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 東京, 2017.11.18
- ・村山光義, 石手靖, 植田史生, 須田芳正, 福士徳文, “スポーツ科学分野の LLLT・LEDT 研究トピック2017”, 第21回日本レーザー・スポーツ医科学学会, 東京, 2017.11.18
- ・稲見崇孝, 佐々木玲子, 村山光義, 宮川博文, 井上雅之, “スポーツ傷害の予防に関するアンケート調査 一・中学生スポーツ選手の保護者を対象として一第1報” 第16回日本発育発達学会, 東京, 2018.3.11

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・日本レーザー・スポーツ医科学学会 理事, 事務局代表 (2017.12まで)
- ・一般社団法人日本バイアスロン連盟 科学委員
- ・公益財団法人日本オリンピック委員会 強化スタッフ

当年中の研究教育活動の概要

当年は超音波診断装置を用いた押圧式筋硬度評価方法の検討を進めるとともにマッサージ前後の筋硬度変化についても研究報告を行った。

加藤 大仁 【教授】

学会発表等

永田直也, 山内賢, 佐々木玲子, 加藤大仁, 近藤明彦, “大学教養体育における教師の指導・関わりが履修者のスポーツ活動に対する動機づけに及ぼす影響”, 東京体育学会第9回大会, 東京, 2018年3月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

日本運動・スポーツ科学学会理事

村松 憲 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(著書)

- ・村松憲(分担執筆), “疲労と身体運動, 2章3. 短時間運動が発生させる疲労(1) 個人球技の身体活動量② テニス”, 杏林書院, 2018年2月.

(論文)

- ・野口和行, 村山光義, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子, “シーズンスポーツ「アウトドアレクリエーション」受講者のライフスキルの獲得: ふりかえりの記述による質的検討”, 体育研究所紀要, 57: 19-31, 2018.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・村松憲, “平成29年度公認上級コーチ専門科目講習会講師「技術のバイオメカニクスの分析」”, ナショナルトレーニングセンター(東京都北区), 2018年2月.

(役職)

- ・公益財団法人日本オリンピック委員会 強化スタッフ(情報・戦略スタッフ)
- ・公益財団法人日本テニス協会 強化情報・科学委員会委員
- ・公益財団法人日本テニス協会 コーチング委員会常任委員
- ・日本テニス学会運営委員
- ・日本スポーツパフォーマンス学会編集委員

(学会シンポジウム司会)

- ・第29回テニス学会シンポジウム「データ活用最前線」司会, 2017年12月

当年中の研究教育活動の概要

2017年12月に、坂井利彰さん、稲見崇孝さんの多大なご尽力のお陰で第29回テニス学会を日吉キャンパスにて開催することができた。協賛企業をはじめ、多くの方々のご協力無しでは開催できないということを改めて実感した。

「テニスにおけるボール速度と回転量」に関する研究・情報発信を本年度も継続した。これまで男子トップ選手を主たる対象としていたが、今後対象の範囲を広げたい。

体育実技「テニス」授業において例年に引き続き、「感謝できることをみつける」という実習を授業開始時に行った。授業のテーマである「テニスを楽しむ」ことにプラスに作用すると感じたほか、技術レベルが相対的に低い学生が縮こまってしまうような雰囲気の開閉にも役立つと感じた。学期末の無記名アンケートにおいて今回も肯定的な意見が多いこともあり、実技時間を減らしてでもこの実習を行う取り組みを続けていこうと考えている。

山内 賢【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・市河 勉, 三浦累美, 山内 賢, “幼児への運動指導における ICT 活用の有効性—2画面同時再生動画の活用に着目して—”, 松山東雲短期大学研究論集, 第47巻, P127-132, 2017.

(執筆)

- ・山内 賢, “ポールウォーキングの運動学「歩行が苦(がく)にならないポールウォーキングの運動学(がく)～ポールウォーキングの効果をまる裸にしてきたキセキ(軌跡・奇跡)と挑戦」”, Walking PLUS vol.12, 一般社団法人日本ポールウォーキング協会, P7-8, 2017.
- ・山内 賢, “ポールウォーキングの運動学(実技編)～ポールウォーキングに「あそ棒体操」を加えてみるのもいいんじゃない?～”, Walking PLUS vol.12, 一般社団法人日本ポールウォーキング協会, P20-22, 2017.
- ・山内 賢, “ポールウォーキングの効果を探るエビデンスへの挑戦～これでいいのか?ポールウォーキングに関する研究成果と効果測定のプロ案～”, Walking PLUS vol.13, 一般社団法人日本ポールウォーキング協会, P25-31, 2017.
- ・山内 賢, “ポールウォーキングの安定性について—その1—”, Walking PLUS vol.14, 一般社団法人日本ポールウォーキング協会, P11-15, 2017.
- ・山内 賢, “ポールウォーキングのテクニカル&セーフティー・マニュアル”, Walking PLUS vol.14, 一般社団法人日本ポールウォーキング協会, P17-24, 2017.
- ・山内 賢, “リック動作について”, Walking PLUS vol.14, 一般社団法人日本ポールウォーキング協会, P25, 2017.

(報告書)

- ・石手 靖, 鳥海 崇, 坂井利彰, 加藤幸司, 須田芳正, 吉田泰将, 山内 賢, “学生のスポーツ行動と大学におけるスポーツ「研究を通じた塾体育会の支援策～統計手法を用いた競技力推定～」”, 慶應義塾大学体育研究所2017年度基盤研究レポート, 慶應義塾大学体育研究所: 4-5, 2018.

学会発表等

- ・山内 賢, 上野優子, 荻田 亮, 上野奈初美, 吉田朔子, 柳川郁生, 三浦累美, 市河 勉, “保育教員志望学生の運動指導能力向上を目指す教育教材に ICT を活用する提案～2画面同時再生が可能な映像教材の利便性～”, 日本体育学会第68回大会, 静岡大学, 2017年9月8日・9日・10日.
- ・上田 大, 山内 賢, 大石健二, 松永修司, 佐藤洋平, 小林哲郎, 久保山 和彦, 黄 仁官, “女子大学生、女子大学陸上長距離選手、女性高齢者における足趾把持筋力、歩行能および重心動揺性との関係”, 日本体育学会第68回大会, 静岡大学, 2017年9月8日・9日・10日.
- ・山内 賢, 上野優子, 市河 勉, 荻田 亮, 上野奈初美, 吉田朔子, 柳川郁生, 峯岸 瑛, 安藤邦彦, “ネットワークカメラの利便性に着目した高齢者が行うポールウォーキング実施前後の歩容分析”, 第72回日本体力医学会大会, 松山大学, 2017年9月16日・17日・18日.
- ・山内 賢, 上野優子, 市河 勉, 荻田 亮, 上野奈初美, 吉田朔子, 細川ゆり, 安藤邦彦, “鹿児島県I市で開催したポールウォーキング教室から予見する参加意欲の向上条件と提案”, 第76回日本公衆衛生学会総会, 鹿児島県文化センター, 2017年10月31日・11月1日・2日.
- ・Ken Yamauchi, Akira Ogita, Ikuo Yanagawa, Tsutomu Ichikawa, Akira Minegishi, and Kunihiko Ando, “Qualitative evaluation of pole walking exercise using monitoring camera images”, The Australian Association of Gerontology 50th National Conference, Crown, Perth, Western Australia, 08-10 November, 2016.
- ・永田直也, 山内 賢, 佐々木玲子, 加藤大仁, 近藤明彦, “大学教養体育における教師の指導・関わりが履修者のスポーツ活動に対する動機づけに及ぼす影響”, 東京体育学会第9回大会, 東京, 2018年3月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・山内 賢, “ポールウォーキングの技術と技能検定および安全性”, 日本ポールウォーキング協会認定ベーシックコーチ資格取得セミナー, 大妻女子大学, 2017年6月11日.

- ・山内 賢, “スポーツの見方・楽しみ方 スポーツインテグレーション～スポーツをすべての人に～:実技1「ポールウォーキングでスマートなウォーキングはいかがでしょうか?」”, 慶應義塾大学・読売新聞市民講座, 慶應義塾大学日吉キャンパス, 2017年6月17日.
- ・山内 賢, “ポールウォーキングの基本を学び、各コースで体験しよう!”, 2017飯綱高原健康ウォーキングフェスティバル, 長野県飯綱高原芝生広場, 2017年9月24日.
- ・山内 賢, “ポールウォーキングの技術と技能検定および安全性”, 2017日本ポールウォーキング協会資格更新講習会, 横浜市万国橋会議センター, 2017年10月28日.
- ・山内 賢, “ポールウォーキングの技術と技能検定および安全性”, 2017日本ポールウォーキング協会認定ベーシックコーチ資格取得セミナー, (株)ながでんウェルネス・フィットネスクラブエフバイエー若里, 2017年11月4日.
- ・山内 賢, “ポールウォーキングの技術と技能検定および安全性”, 2017日本ポールウォーキング協会資格更新講習会&コーチミーティング, 慶應義塾大学日吉キャンパス, 2017年12月2日.
- ・山内 賢, “ポールウォーキングの技術と技能検定および安全性”, 日本ポールウォーキング協会認定マスターコーチ資格取得セミナー, 慶應義塾大学日吉キャンパス, 2017年12月3日.
- ・山内 賢, “ポールウォーキングのコーチングと安全性”, 2018日本ポールウォーキング協会マスターコーチプロ研修会, 慶應義塾大学日吉キャンパス, 2018年1月20日.
- ・山内 賢, “ポールウォーキングの技術と技能検定および安全性”, 2018日本ポールウォーキング協会資格更新講習会, 横浜市万国橋会議センター, 2018年2月17日.
- ・山内 賢, “ポールウォーキングの技術と技能検定および安全性”, 2018日本ポールウォーキング協会マスターコーチ資格不合格者対象補習, 慶應義塾大学日吉キャンパス, 2018年3月25日.

研究助成等

- ・体育・スポーツに ICT 教育を活用する試み 4～遅延映像を用いた観察学習方法のシステムデザインと効果の可能性を探る～, 体育研究所内研究費, 337,700円
- ・Qualitative evaluation of pole walking exercise using monitoring camera images, 小泉基金, 195,200円

当年中の研究教育活動の概要

フィットネスウォーキングの種目として、2本の歩行専用ストックを用いて行うポールウォーキングがある。ポールウォーキングは、「歩行能力の改善に効果的であるが、正しい技術の再現が無ければ効果が低くなる」という条件が技術指導マニュアルに明記されている。そこで、本年度の研究テーマは、「的確な技術獲得に必要な学習環境の創造」を取り上げ、学習者同士が動作確認して問題解決を試みるアクティブラーニングの誘発を試みた。アクティブラーニングの誘発には、映像(ムービー)を用いた ICT 学習教材が有効であると考えた。効果の検証はアンケート調査で行い、映像教材は、学習者の深部感覚(動作のカンやコツ)に刺激を与えやすくなり、遅延映像は、映像学習に活用する際の興味が大きく、技術習得を目的とした学習目標や計画の立案に貢献する ICT 教材として大いに活用できることが判明した。

吉田 泰将 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(著書)

新中学校学習指導要領に準拠した安全で効果的な剣道授業の展開<ダイジェスト版第3版>, 一般財団法人全日本剣道連盟, 武道等指導充実・資質向上支援強化委員会, 2018.2

(執筆)

特別企画: 大人開始組のための昇段審査「力を抜くことを常に意識する」, 剣道時代2017.8号, 体育とスポーツ出版社

(報告書)

石手 靖, 鳥海 崇, 坂井利彰, 加藤幸司, 須田芳正, 吉田泰将, 山内 賢, “学生のスポーツ行動と大学におけるスポーツ「研究を通じた塾体育会の支援策～統計手法を用いた競技力推定～」”, 慶應義塾大学体育

研究所2017年度基盤研究レポート，慶應義塾大学体育研究所：4-5，2018.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・日本武道学会 評議員 通年
- ・一般財団法人全日本剣道連盟 評議員 通年
- ・一般財団法人全日本剣道連盟 普及委員会学校教育部会・委員 通年
- ・一般財団法人全日本剣道連盟 社会体育指導員養成講習会 講師 通年
- ・文部科学省委託事業・武道等指導充実・資質向上支援強化委員会 委員・通年
- ・一般財団法人全日本学校剣道連盟 常任理事・事務局長 通年
- ・第59回全国教職員剣道大会(埼玉) 総務委員長 (2017.8.5)
- ・全日本学生剣道連盟・関東学生剣道連盟 審判員 通年
- ・全日本学連剣友会 会長推薦理事 通年
- ・関東学連剣友連合会 理事長 通年
- ・東京学連剣友連合会 理事 通年
- ・慶應義塾体育会剣道部(三田剣友会) 副師範 通年
- ・慶應義塾大学医学部体育会剣道部 師範代行 通年

(資格)

- ・一般財団法人全日本剣道連盟 剣道教士八段

(大会出場)

- ・第17回 寛仁親王杯剣道八段選抜剣道大会 (2017.9.2)

当年中の研究教育活動の概要

文部科学省委託事業・武道等指導支援強化委員会の委員として、中学校授業協力者の養成とデータベースの構築や授業協力者を活用した授業の視察を行い、さらにアンケート調査やインタビューにより現場の実態を明らかにしていく活動を行っている。

板垣 悦子 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・野口 和行, 村山 光義, 村松 憲, 板垣 悦子, 東海林祐子, “シーズンスポーツ「アウトドアレクリエーション」受講者のライフスキルの獲得：ふりかえりの記述による質的検討”, 体育研究所紀要, 57 (1) : 19-31, 2018.1

(研究資料)

- ・板垣 悦子, 木林 弥生, 小林 典子 “大学生が「ピラティス」を受講する目的—慶應義塾大学生とアメリカ人大学生の場合”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 57巻:33-41, 2018年1月.

学会発表等

- ・板垣 悦子, 木林 弥生, 小林 典子, “ピラティス授業の受講目的から日本人大学生とアメリカ人大学生の違いを探る”, 日本体育学会第68回大会, 静岡, 2017年9月

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・板垣 悦子, “慶應義塾大学薬学部 健康づくり教室”, 慶應義塾大学薬学部 医療部門・社会連携センター 社会薬学部門・港区後援 慶應義塾大学芝共立キャンパス, 2017年4月-2018年1月.

当年中の研究教育活動の概要

「ピラティス」は健康づくりの一助と成り得るかをテーマに授業時に学生に記入してもらっている「心身ジャーナル」から受講の目的を分析検討した。またアメリカ人学生についても同様に分析した。薬学部で実

施している「健康づくり教室」内にも「ピラティス」を取り入れ、生活の中に上手く取り入れてもらえるよう指導を継続している。

加藤 幸司 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(報告書)

- ・石手靖, 鳥海崇, 坂井利彰, 加藤幸司, 須田芳正, 吉田泰将, 山内賢, “学生のスポーツ行動と大学におけるスポーツ「研究を通じた塾体育会の支援策～統計手法を用いた競技力推定～」”, 慶應義塾大学体育研究所2017年度基盤研究レポート, 慶應義塾大学体育研究所: 4-5, 2018.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・平成29年度 公益財団法人日本体育協会公認コーチ専門科目(後期)講習会講師(バドミントン), 埼玉, 2018年1月

(役職)

- ・慶應義塾大学体育会バドミントン部女子監督
- ・日本バドミントン学会監事

当年中の研究教育活動の概要

初心者を対象にした授業をしているが、彼らのプレーや動きはバドミントン指導に携わっている私にさまざまなヒントを与えてくれると感じている。指導現場で常識とされているのとは違うやりかたでできるということを彼らは見せてくれることがある。身体がバドミントン脳に縛られていないからか、必要に応じて身体がいろいろな動き方をする。これは経験者にはほとんど見られないことで、身体が頭からかなり自由になっているようである。だから何を教えるべきなのかを考えさせられる。何も教えない方がいいのかも知れないと思うときもある。教えるより何か問いを抱かせることの方が大切なのではないか。バドミントンはすべて1回限りの現象なので、頭でわかるよりも身体を通してわかるように働きかけることが重要であると考えるながら授業を進めている。

須田 芳正 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・須田芳正, 岩崎陸, 松山博明, 福士徳文 “サッカーの本質的な要素を高める為のトレーニングに関する一考察～ボール奪取地点とシュート地点に着眼して～”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 第57巻第1号: 9-17, 2018.

(報告書)

- ・石手靖, 鳥海崇, 坂井利彰, 加藤幸司, 須田芳正, 吉田泰将, 山内賢, “学生のスポーツ行動と大学におけるスポーツ「研究を通じた塾体育会の支援策～統計手法を用いた競技力推定～」”, 慶應義塾大学体育研究所2017年度基盤研究レポート, 慶應義塾大学体育研究所: 4-5, 2018.

学会発表等

- ・福士徳文, 河村剛光, 吉村雅文, 須田芳正, 石原美彦, “サッカー選手の競技力評価と体力テスト結果との関係の検討”, 日本体育学会第68回大会(静岡大学・静岡), 2017.9
- ・村山光義, 石手靖, 植田史生, 須田芳正, 福士徳文, “スポーツ科学分野のLLLT・LEDT研究トピック2017”, 第21回日本レーザー・スポーツ医科学学会, 東京, 2017.11.18.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・早稲田大学オープン教育センター講師(非常勤), 通年

(役職)

- ・慶應義塾大学体育会サッカー部監督

野口 和行 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・野口和行, 村山光義, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子 “シーズンスポーツ「アウトドアレクリエーション」受講者のライフスキルの獲得—ふりかえりの記述による質的検討—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 57: 19-31, 2018.

(執筆)

- ・野口和行, “対象に合わせたキャンプ(スペシャルニーズ・キャンプ)の推進”, キャンプディレクター必携, (公社)日本キャンプ協会: pp74-80, 2017.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・野口和行 “動き出したスペシャル・ニーズ・キャンプ～社会の隅々までキャンプを届けよう”, 愛知県キャンプ協会キャンプアカデミー, 至学館大学, 2017年7月.
- ・野口和行 “アウトドア活動と環境保護は両立するか”, 慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座, 慶應義塾大学, 2017年10月.

(講師)

- ・(公財)日本教育科学研究所アウトドアゲーム指導法講習会, 国立乗鞍青少年交流の家, 2017年10月.
- ・自然体験活動指導者養成研修会, “対象の理解” 国立赤城青少年交流の家, 2018年1月.

(役職)

- ・大学スケート研究会理事長
- ・日本野外教育学会理事
- ・(公社)日本キャンプ協会理事
- ・(公社)日本キャンプ協会キャンピング編集タスク委員
- ・(公社)日本キャンプ協会ビジョン策定委員会委員
- ・(独)国立青少年教育振興機構子どもゆめ基金専門委員
- ・(公財)日本教育科学研究所自然体験活動推進委員

奥山 静代 【専任講師】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

健康・スポーツ科学女性研究者ネットワーク世話人

当年中の研究教育活動の概要

現在は「乳幼児期における心臓および筋の形態と機能の発達」という研究課題で共同研究を行っている。子どもの身体の発育を対象とした研究は数多くあるが、心臓の形態や心拍出量といった機能を評価した研究は少なく。尚且つ、乳幼児期に関する研究はわずかで、0歳児、1歳児のくくりで評価したデータはあっても、短期間で大きく成長する乳幼児期の変化を詳細に追った研究は見当たらない。現在はそのデータを蓄積中である。

坂井 利彰 【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(執筆)

- ・坂井利彰, “全豪オープン 大坂なおみ四大大会優勝候補に” 東京中日新聞朝刊, 2018年1月
- ・坂井利彰, “テニスに競技に関する最新の動向について” NSCA JAPAN, 2017年10月

(報告書)

- ・石手靖, 鳥海崇, 坂井利彰, 加藤幸司, 須田芳正, 吉田泰将, 山内賢, “学生のスポーツ行動と大学におけるスポーツ「研究を通じた塾体育会の支援策～統計手法を用いた競技力推定～」”, 慶應義塾大学体育研究所2017年度基盤研究レポート, 慶應義塾大学体育研究所: 4-5, 2018.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・公益財団法人世田谷区スポーツ振興財団・こどもの体力・基礎運動能力向上事業・世田谷区ジュニアアカデミー (テニス) 総合監修

(講演)

- ・日本テニス学会『シンポジウム：データ活用最前線』, 2017年12月

(解説)

- ・日本放送協会『ウインブルドン2017』, 2017年6月
- ・日本放送協会『ATP ツアーファイナル2017』, 2017年11月
- ・日本放送協会『全豪オープン2018』, 2018年1月
- ・日本放送協会『マイアミオープン2018』, 2018年3月

(役職)

- ・慶應義塾体育会副理事
- ・慶應義塾体育会庭球部監督
- ・慶應チャレンジャー国際テニストーナメント (慶應義塾主催) トーナメントディレクター
- ・公益財団法人日本テニス協会 理事
- ・公益財団法人日本テニス協会 普及育成本部副本部長
- ・公益財団法人日本オリンピック委員会 強化スタッフ

鳥海 崇 【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・鳥海崇, 綿田博人, “東京六大学野球リーグ及び東都大学野球リーグを含めた各大学野球連盟における過去30シーズンの平均競技力の比較研究”, 体育研究所紀要, 57(1): 43-56, 2018.

学会発表等

- ・Toriumi T., “Compare the superiority of Japanese Collegiate Baseball Leagues”, MathSport International 2017 Conference, Padua (Italy), 26-28 June 2017.
- ・Toriumi T., “Inter-varsity Matches in the UK and Japan”, 8th International Conference on Sports & Society, London (UK), 10-11 July 2017.

当年中の研究教育活動の概要

9月まで英国ケンブリッジ大学ダウニングカレッジにおいて訪問研究員として滞在。9月に帰国し、授業などを担当した。

永田 直也 【専任講師】

学会発表等

- ・ Nagata, N. “Effect of consistent preparation behavior in basketball free throw”, 22th Annual Congress of the European College of Sport Science, Germany, July 2017.
- ・ 永田直也, 山内賢, 佐々木玲子, 加藤大仁, 近藤明彦, “大学教養体育における教師の指導・関わりが履修者のスポーツ活動に対する動機づけに及ぼす影響”, 東京体育学会第9回大会, 東京, 2018年3月.
- ・ 立谷泰久, 米丸健太, 秋葉茂季, 永田直也, “2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けての心理サポートとその後(2)”, 日本スポーツ心理学会第44回大会, 大阪, 2017年11月.
- ・ 高土真奈, 吉川政夫, 永田直也, “企業アスリートのキャリア・トランジションプロセスの分析—その特徴とサポートの在り方—”, 日本スポール心理学会第44回大会, 2017年11月).

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・ “スポーツ心理学”, 公益社団法人東京都障害者スポーツ協会主催 平成29年度中級スポーツ指導員養成講習会, 東京, 2018年1月.

研究助成等

- ・ “ボールゲーム熟練者の多物体追跡課題における特徴に関する研究”, 平成29年度慶應義塾学事振興資金, 200千円.

当年中の研究教育活動の概要

当年は、専任講師としての1年目であった。

当年は、基盤研究コアテーマ①「FD実践としての体育授業プログラムの在り方」2班の測定にかかわる作業を終えた。今後は、成果をまとめ公表を進めていくこととなる。班員で積み重ねてきた知見を教育活動に生かせるようにしていくことが次の課題である。

また、多物体追跡課題に関する研究、プリ・パフォーマンス・ルーティンに関する研究についても、歩みは遅いが着実に進めている。今後も、それぞれが真理に迫っていけるように継続した活動を実施していく。

福士 徳文 【助教(有期)】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・ 須田芳正, 岩崎陸, 松山博明, 福士徳文, “サッカーの本質的な要素を高める為のトレーニングに関する一考察～ボール奪取地点とシュート地点に着目して～”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 第57巻第1号, 2018.1

学会発表等

- ・ 福士徳文, 河村剛光, 吉村雅文, 須田芳正, 石原美彦, “サッカー選手の競技力評価と体力テスト結果との関係の検討”, 日本体育学会第68回大会(静岡大学・静岡), 2017.9
- ・ 石原美彦, 福士徳文, 青葉幸洋, 吉村雅文, 内藤久士 “日本人サッカー審判員の体力および身体特性”, 日本体育学会第68回大会(静岡大学・静岡), 2017.9
- ・ 村山光義, 石手靖, 植田史生, 須田芳正, 福士徳文, “スポーツ科学分野のLLLT・LEDT研究トピック2017”, 第21回日本レーザー・スポーツ医科学学会学術集会, (日本大学・東京), 2017.11
- ・ 吉村雅文, 井口祐貴, 福士徳文, 宮森隆行, 松本直也, 今川正浩, “女子サッカー選手の競技力向上を目指して—身体的負荷指標プレイヤー™に着目して—”, 日本フットボール学会 15th Congress (東京学芸大学・東京), 2017.12

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・ 福士徳文, “慶應義塾通信教育課程 青森講演 「スポーツのコーチングとは?～コーチング哲学と現場での実践例～」”, 青森県観光物産館アスパム, 平成29年4月9日

(講師)

- ・武蔵野大学教養教育部「健康体育2 スキー実習Ⅱ」非常勤講師，長野県志賀高原スキー場，平成30年2月12日～2月16日
- ・順天堂大学医療看護学部「野外スポーツ実習(スキー)」非常勤講師，山形県蔵王温泉スキー場，平成30年2月20日～2月24日

(役職)

- ・公益社団法人全国大学体育連合総務部委員
- ・公益社団法人全国大学体育連合研修部委員
- ・慶應義塾大学体育会サッカー部コーチ

(シンポジウム)

- ・福士徳文，慶應義塾大学体育研究所・(公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム「オリンピック教育とスポーツボランティア～東京2020に向けた大学・教員・学生の関わり～」，コーディネーター（慶應義塾大学体育研究所基盤研究3班の活動として），（慶應義塾大学・横浜），2017年12月2日

研究助成等

- ・福士徳文，“サッカー試合中における動きの特性と体力テスト結果との関係”慶應義塾学事振興資金，30万円

当年中の研究教育活動の概要

当年の研究活動は、予てよりテーマにしているサッカー選手の体力テストに関する研究を進め、学会や所内研究会にて発表を行い、論文化に向けて準備を進めた。今年度は、学事振興資金を獲得し、サッカー選手の競技力と体力テスト結果との関係についてさらに検討を進めた。また、基盤研究3班の活動として、シンポジウムのコーディネーターを務めた。大学体育教員としての使命やあり方に関してもさらに知見を深めていきたい。

教育活動では、今年度も様々な対象に対してスポーツ教育を実践する多くの機会をいただいた。次年度は、助教(有期)の最終年度として、塾生や地域の方々へのスポーツ教育、スポーツ振興・普及活動にさらに尽力していきたい。

稲見 崇孝 【助教】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・Inami, T., Tsujimura, T., Shimizu, T., Watanabe, T., Lau, W. Y., Nosaka, K., “Relationship between isometric contraction intensity and muscle hardness assessed by ultrasound strain elastography”, *European Journal of Applied Physiology*, 117: 843-852, 2017.
- ・Inami, T., Shimizu, T., “The change in muscle hardness after static stretching evaluated by different ultrasound elastography techniques may be equivalent”, *Journal of Sports Medicine and Physical Fitness*, 57: 161-162, 2017.
- ・Mineta, S., Inami, T., Mariano, R., Hires, N., “High lateral plantar pressure is related to an increased tibialis anterior/fibularis longus activity ratio in patients with recurrent lateral ankle sprain”, *Open Access Journal of Sports Medicine*, 8: 123-131, 2017.
- ・Saito, A., Ema, R., Inami, T., Maeo, S., Otsuka, S., Higuchi, M., Shibata, S., Kawakami, Y., “Anatomical cross-sectional area of the quadriceps femoris and sit-to-stand test score in middle-aged and elderly population: Development of a predictive equation”, *Journal of Physiological Anthropology*, 36: 3, 2017.

(執筆)

- ・稲見崇孝，“骨格筋の硬さ情報をケガの予防に活かすための基礎研究 ―超音波を使って硬さがわかる”，*トレーニングジャーナル*，ブックハウスHD，454: 18-23，2017.

(報告書)

- ・稲見崇孝, “オリンピックを通じたスポーツ振興・教育と主催学会活動への布石”, “RIO to TOKYO” 平成28年度慶應義塾大学体育研究所活動報告書, 慶應義塾大学体育研究所, 7-9, 2017.

学会発表等

- ・折笠佑太, 成田崇矢, 小野田圭祐, 杉山弘樹, 大谷真喜子, 稲見崇孝, 野村孝路, 瓶子勇治郎, 徳本奈保美, 内藤直樹, 茶木康寛, 安田千万樹, 金岡恒治, “飛込ジュニア選手の体幹伸展可動性が肩関節屈曲可動域と倒立アライメントに及ぼす影響”, 第20回水と健康医学研究会, 東京, 2017年5月27日.
- ・大谷真喜子, 成田崇矢, 稲見崇孝, 折笠佑太, 保富宗城, “飛込選手のバランス感覚について”, 第20回水と健康医学研究会, 東京, 2017年5月27日.
- ・Inami, T., Murayama, M., Shima, N., Nosaka, K., “Changes in biceps brachii muscle hardness assessed by ultrasound strain elastography after eccentric exercise of the elbow flexors”, 22th annual congress of the European College of Sport Science, Essen (Germany), 2017年7月5日-8日.
- ・Murayama, M., Nosaka K., Inami, T., Shima, N., Yoneda, T., “Optimum portion of force-displacement curve to assess muscle hardness with a push-in meter”, 22th annual congress of the European College of Sport Science, Essen (Germany), 2017年7月5日-8日.
- ・Shima, N., Murayama, M., Inami, T., Nosaka, K., “Biceps brachii mechanomyographic and electromyographic activity changes after eccentric exercise of the elbow flexors”, 22th annual congress of the European College of Sport Science, Essen (Germany), 2017年7月5日-8日.
- ・Nakagawa, K., Iizuka, S., Inami, T., Yonezu, T., Higashihara, A., Abe, T., “Influence of full-marathon running on force control and proprioception in knee joint”, 22th annual congress of the European College of Sport Science, Essen (Germany), 2017年7月5日-8日.
- ・Yoshimura, A., Inami, T., Mineta, S., Shudo, K., Mariano, R., Hirose, N., “The influence of foam rolling on flexibility and muscle architecture”, 22th annual congress of the European College of Sport Science, Essen (Germany), 2017年7月5日-8日.
- ・村山光義, 稲見崇孝, 宮川博文, 内山孝憲, 米田継武, “押圧法による上腕二頭筋と上腕筋の筋硬度分離評価”, 第72回日本体力医学会大会, 愛媛, 2017年9月16日.
- ・山崎英二, 成田崇矢, 折笠佑太, 手塚武士, 杉山弘樹, 野村孝路, 大谷真喜子, 金岡恒治, 稲見崇孝, 瓶子勇治郎, 徳本奈保美, 内藤直樹, 安田千万樹, “飛込ナショナル選手の腰痛群と非腰痛群の身体特性の比較”, 第25回日本腰痛学会, 東京, 2017年11月4日.
- ・稲見崇孝, 村山光義, 宮川博文, “マッサージ後に生じる腓腹筋 stiffness 変化の定量化”, 第28回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 東京, 2017年11月18日.
- ・峯田晋史郎, 稲見崇孝, 深野真子, 福林徹, 広瀬統一, “日本語版 identification of functional ankle instability tool の信頼性、妥当性、再現性、識別能の検討”, 第28回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 東京, 2017年11月18日.
- ・吉村茜, 稲見崇孝, 峯田晋史郎, 周藤滉平, 熊井司, 広瀬統一, “Foam Roller を用いたセルフマッサージが関節可動域および筋の伸長性に及ぼす影響”, 第28回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 東京, 2017年11月18日.
- ・米津貴久, 中川剣人, 稲見崇孝, 深野真子, 東原綾子, 飯塚哲司, 阿部平, 成田崇矢, “フルマラソン後の筋硬度と筋形状変化及び走破タイムとの関連性について”, 第28回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 東京, 2017年11月18日.
- ・稲見崇孝, 佐々木玲子, 村山光義, 宮川博文, 井上雅之, “スポーツ傷害の予防に関するアンケート調査小・中学生スポーツ選手の保護者を対象として 第1報”, 第16回日本発育発達学会, 東京, 2018年3月11日.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・稲見崇孝, “KEIO スポーツレガシー”, (公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム オリンピック教育とスポーツボランティア 東京2020に向けた大学・教員・学生の関わり, 神奈川, 2017年12月2日.

- ・稲見崇孝, “コンディショニング 筋肉の硬さ評価”, 2018年スポーツ傷害予防講座 愛知県教育委員会, 愛知県理学療法士協会, 愛知, 2018年1月28日.
- ・稲見崇孝, “関節のゆるさと硬さ”, 2018年スポーツ傷害予防講座 愛知県教育委員会, 愛知県理学療法士協会, 愛知, 2018年1月28日.

(講師)

- ・吉村茜, 稲見崇孝, “硬くなる筋肉をどうやって数値で知るか? パフォーマンス向上のための方策”, 日本水泳連盟飛込競技ナショナルジュニア合宿勉強会, 三重, 2017年12月24日.

(役職)

- ・日本バイオメカニクス学会大会実行委員
- ・KEIO 2020 project プロジェクトコーディネーター

研究助成等

- ・“最も筋の材質を変化させる手技は何か? 強度や時間の要素を加えた網羅的検討”, 若手研究 B, 科学研究費補助金 (文部科学省・日本学術振興会), 16K21431, 115万円.
- ・中垣明美 (名古屋市立大学), 稲見崇孝, “マタニティビクス中の自律神経活動と生理学的指標からみた母児へのリスク評価”, 基盤研究 C, 科学研究費分担金 (文部科学省・日本学術振興会), 26463421, 0.5万円.
- ・“水泳飛込競技におけるジュニア合宿中の身体後面筋柔軟性の経時変化と従来指標との関係”, 浅野均一記念研究奨励基金, 平成29年度研究奨励金, 30万円.
- ・“フルマラソン後に材質変化する筋を特定する”, 慶應義塾学事振興資金, 20万円.

当年中の研究教育活動の概要

骨格筋の3特性(機能・形態・材質)変化に資する知見の獲得に向けた研究活動を遂行した。また、2020年に日吉キャンパス(川崎市・横浜市)が受け入れるイギリスチームに対する学生ボランティア組織【KEIO 2020 project】のコーディネーターとして、塾長室や国際連携推進室と連携した本格的な活動をスタートさせた。

2. 所内定例研究会発表会要旨

第1回 4月11日

永田 直也

プリ・パフォーマンス・ルーティンにおける動作パターンと課題動作に関する研究

バスケットボール・フリースローなど実施者の意思で開始時期を決めることができる課題では、実施者は最適な心理・身体状態を獲得するために、プリ・パフォーマンス・ルーティン (Pre-performance Routine : 以下PPRと略す) と呼ばれる準備行動を行う。このPPRが実施者の心理面に及ぼす効果は示されているが、身体面に及ぼす影響は検討されていない。そこで本発表は、PPRの動作パターンと課題動作の関係に関する研究を行い、動作パターンの一定性が課題動作に及ぼす影響の解明を目指す研究の、途中経過を発表した。

測定結果には、リリース直前の手・肘関節からなるベクター角に大きな誤差が生じていることが特徴としてみられた。しかし、測定結果自体の誤差が大きいなど、測定の方法からの再検討が必要と考えられた。

第1回 4月11日

福士 徳文

サッカーの指導現場において有効活用できる体力テスト項目の検討 その2

【目的】 本研究の目的は、サッカー選手の競技力を12項目から評価・点数化し、その結果と体力テスト結果との関係を検討することであった。

【方法】 被験者は、男子大学サッカー部員70名 (年齢 : 19.8 ± 0.9歳) で、体力テストとして計8種目 (長座体前屈、50m走 (10m, 20m, 30m, 40m通過タイム含)、垂直跳び、立ち幅跳び、10m×5シャトルラン、アロウヘッド・アジリティーテスト (AAT)、プロアジリティーテスト、YOYO IR2) を実施し

た。測定方法は、それぞれの参考文献 (日本サッカー協会 (JFA), 2006、Jens Bangsbo and Magni Mohr, 2015、文部科学省, 1999、有賀ほか, 2013) に準拠し、実施した。また、競技力の評価・点数化については、サッカー指導教本2012 (JFA) における「サッカー選手の基本要素」として挙げられている項目を参考に、12の評価項目 (運ぶ (ドリブル、フェイント)、飛ばす (キック、ヘディング、スローイング)、受ける (コントロール)、奪う (タックル、ショルダーチャージ)、パス (ショート、ミドル、ロング)、判断 (ゲームの理解、情報収集力)、コミュニケーション (関わり)、フィットネス (フィジカルとメンタル)、競り合い、ボールに寄る (ボールを失わないテクニック)、パスしたら動く・スペースをつくる・使う、コーディネーション能力) を設定し、3名の指導者によりすべての選手をそれぞれ7段階で評価した。その後、各評価者内でTスコア化し、平均値を算出した。統計処理は、競技力評価に関する評価者間の関係、および体力テスト結果間の関係の検討にはピアソンの積率相関係数を用いた。また、各評価項目におけるそれぞれの平均評価値を従属変数、各種体力テスト結果の測定値を独立変数として、重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。重回帰分析を行う際に、テスト項目間に0.8程度以上の相関がみられた場合には、従属変数との相関の強さを考慮し、項目数を減らして分析を行った。なお、統計的有意水準は5%未満とした。

【結果および考察】 本研究では、大学サッカー選手において指導者の評価から競技力を点数化し、競技力と体力テスト結果を重回帰分析することで、これらの関係を検討することを目的とした。その結果、R²乗値が0.3以上得られた競技力の項目は7項目 (運ぶ、飛ばす、受ける、奪う、フィットネス、パスしたら動く、コーディネーション) であり、R²乗値が0.3未満の項目は5項目 (パス、判

断、コミュニケーション、競り合い、ボールに寄る)であった。また、競技力の評価値の説明として挙げられたテスト種目は5種目(10m通過タイム、立ち幅跳び、長座体前屈、AAT、30m通過タイム)であった。これらの種目については、競技力向上を目指す指導などの一手段として、現場で活用可能な種目であると考えられる。中でも、10m通過タイムにおいては、6項目の説明として挙げられていることに加え、同一サッカー部内で競技パフォーマンスによって分けられた3チーム間で比較した調査(福士ほか, 2016)においても競技パフォーマンスとの関連を反映する有用なテストである可能性が示唆されていることから、特に重要なテストであると考えられる。さらに、JFAでは、JFAフィジカルフィットネスプロジェクトとして体力測定の側面から、日本と欧州(フランス, イタリア)との比較・分析を行った結果、スピード(10m)については改善の余地があると結論づけている(JFA, 2015)ほど今後の強化点としても重要な位置付けとなっていることから、十分に活用すべきであることが考えられる。一方、競技力評価と体力テスト項目が関係しない項目については、体力要素以外の要素が介在する可能性や、その他の体力測定を利用するなど、さらなる検討が必要であると考えられる。

【結論】 本研究において、サッカー選手の競技力として評価した項目と、関係があると考えられる体力テスト項目は5種目であり、これらの項目については現場で活用可能な種目であると考えられる。一方、競技力評価と体力テスト項目が関係しない項目もあったため、評価の観点やその他の体力テストの利用など、さらなる検討が必要である。

第2回 5月16日

稲見 崇孝

スポーツ医科学研究領域へのアプローチ

これまでに実施してきたスポーツ医科学に関する研究活動を以下のように時系列にて紹介した。

1. 中高齢者の健康維持増進と変形性関節症予防のための下肢筋力トレーニング

健康維持増進を目的とする70歳以上の高齢者を対象に、自重でのトレーニングやプールにてエクササイズを実施し、その前後で生じた下肢の筋力トレーニングの効果を述べた。特に、自重での下肢筋力トレーニングは大腿四頭筋筋力をマシンなど特別な機器を用いなくても増加させる可能性を示した¹⁾。

2. プールでの妊婦スポーツや小児肥満運動教室の効果

妊娠16週から許可される水中での妊婦スポーツにおいて、参加のためのメディカルチェックやプログラム中のデータから自律神経活動および心拍変動の解析を行い、エクササイズによって生じた胎児と母体の身体変化を示した^{2,3)}。一方、近年増加する小児肥満児に対する運動方法として注目される水中での運動プログラム、および小児肥満児がすべき運動ガイドラインを紹介した⁴⁾。

3. トップアスリートのアスレティックトレーニングとコンディショニング評価

プロのバスケットボールおよびバレーボールチームに所属する選手らに実施したメディカルチェックのデータや、陸上短距離選手の肉ばなれに関する詳細データ(筋活動、MR画像、超音波画像等)を用いて、ケガを予防するために必要な基礎研究を実施し、機能不全が生じた症例などを紹介した^{5,6)}。

4. 骨格筋の機能・形態・材質特性研究

骨格筋の特性である【機能】【形態】に【材質】の要素を加え、特性間の相互作用や対応関係を多角的に調査している取り組みを紹介した^{6,7,8)}。超音波技術を応用したエラスト

グラフィ機能の搭載される機種を用いた材質研究は、生体内で起こる材質変化を局所的に評価できる利点があることを強調した。

備考(文献)

- 1) 稲見崇孝ほか. 中高齢者の下肢筋力増強訓練に関する研究. 愛知医科大学医学会雑誌, 35: 39-48, 2007.
- 2) 中垣明美, 稲見崇孝ほか. 妊婦水泳中に胎児徐脈をきたした一事例. 日本臨床スポーツ医学会誌, Acc. Pub., 2017.
- 3) Nakagaki, A., Inami, T., et al. Differences in autonomic neural activity during exercise between the second and third trimester of pregnancy. J Obstet Gynaecol Res, 42: 951-959, 2016.
- 4) 稲見崇孝. 肥満・肥満予防には運動を! 愛知県理学療法士会小児福祉部 小児連続講座, 愛知, 2010年12月.
- 5) 稲見崇孝ほか. 筋の形態学および機能的考察を行った陳旧性大腿直筋肉ばなれの一症例. 日本臨床スポーツ医学会誌, 20: 364-369, 2012.
- 6) 稲見崇孝. 骨格筋の硬さ情報をケガの予防に活かすための基礎研究—超音波を使って硬さがわかる. トレーニングジャーナル, 18-23, 2017.
- 7) Inami, T., et al. Relationship between isometric contraction intensity and muscle hardness assessed by ultrasound strain elastography. Eur J Appl Physiol, 117: 843-852, 2017.
- 8) Inami, T., et al. Assessment of individual muscle hardness and stiffness using ultrasound elastography. J Phys Fitness Sport Med, 5: 313-317, 2016.

第3回 6月13日

山内 賢

体力評価に技能的要素を加える試み

体力測定は、個人の身体活動能力を測定する手段として活用される。評価は、動作の「速さ」、「反復回数」、「距離」等の量的な成果主義に従うことが一般的である。しかし、成果主義に従った同じ測定値の評価には、「はたして同格でよいのであろうか?」という疑問が残る。いわゆる、量の中に潜む質の評価を軽視している実状である。本研究は、動作の「巧さ」、「姿勢」という質的な要素(個人差)を量的評価に付加する方法の追求である。「動き」に理屈が存在することを前提として、記録に潜む質的分析をすることは、効果的な運動処方を提案する礎になると考えられる。体力測定の様子を撮影して、距離を単眼計測法から求め、時間をビデオタイマーで記録し、回数をデジタル的にカウントすれば、映像は量的評価を可能にする。同時に映像は視覚的情報そのものであり、動作をモルフォロギー的に観察すれば、質の評価を可能にする。体力測定の単なる記録に、その記録がどのような動作で数量化されたのかを加えて、量と質を同時に評価する試みは、斬新な体力測定の意匠であり、体力測定にAR(Augmented Reality: 拡張現実)とMR(Mixed Reality: 複合現実)を導入する可能性への投石になる。

第3回 6月13日

加藤 大仁

1964年、2020年、2つの東京オリンピック—何が行われたのか、そして何が行われようとしているのか—

—昨年の研究会では、東京へのオリンピック招致が目指された背景として、オリンピックを奇貨とした都市の再生や経済停滞からの脱却、バブルの崩壊により頓挫した臨海地区開発といった目論見があったことを指摘した。また、今後は今迄以上に「2020年のオリ

ンピックまでに」というフレーズが、ある種の合言葉のような形で使われる可能性が高いことにも言及した。数字的な区切りの良さもあるが、やはりオリンピック開催という錦の御旗が、スポーツ以外の各政策領域でも、各種政策を正当化するためのツールとして用いられていると考えるべきであろう。

ところで、2020年のオリンピックについて語る際には、1964年のオリンピック開催を通じて、インフラが整備されたこと等、高度成長期という古き良き時代の記憶を呼び起こすような形で語られることが多い。

そこで、今回は1964年のオリンピックの際に何がなされたのか、インフラ整備、すなわち首都高の整備や東海道新幹線の開通といった比較的良く知られたことから、それ程知られていないことまでいくつか取り上げて紹介したうえで、オリンピック開催に伴うプラスの側面、マイナスの側面について私見を述べた。

加えて、2020年のオリンピックと絡めて語られることの多い「日本再興戦略」、「観光立国」、「国家戦略特区」といった言葉について説明したうえで、スポーツの将来を考えるうえで大切なのは、東京オリンピック後を見据えた議論をすることだと指摘した。

第4回 7月11日

村松 憲

大学生テニス選手のサービスと フォアハンドグラウンドストロークの速度と 回転量について

テニスを競技として捉えた場合、ボールの速度と回転量を把握することは極めて重要であると考えられる。しかしながらこれまで、回転量を発表した研究は殆どなく、また有ったとして実験室でのデータにとどまり、実際の試合のデータは未知のままであった。そこで村松ほか(2010)が世界トップクラス選手の回転量を発表し、村松ほか(2015a)および村松ほか(2015b)がそれぞれサービス、フォ

アハンドグラウンドストロークの速度と回転量の両方を発表した。また村上ほか(2016)はより短時間で速度と回転量を計測する「トラックマン」の精度について発表を行い、また村松(2017)は相手ボールの「強さ」が自分の打つボールの「強さ」とどのような関係にあるのか、考察を行っている。このように近年、ボール速度と回転量についての研究が盛んに行われるようになった一方、大学生を対象とした研究が少なく、日本トップ選手との比較や世界トップ選手との比較が困難な状況にある。そこで本研究では、大学生トップクラス選手のサービスおよびフォアハンドグラウンドストロークについて、ボールの速度と回転量がどの程度なのかを把握し、日本トップ選手や世界トップ選手との程度異なるのか、という点について考察をすることを目的とした。サービスに関しては、日本トップ選手とほぼ同様の速度-回転量関係であった(回帰直線がほぼ重なった)が、回転量が4000rpm以上のショットが殆ど無く、また世界トップ選手と比較すると、同じ速度で概ね500rpmほど回転量が少なかった。フォアハンドグラウンドストロークに関しては、同じ速度において、日本トップ選手よりも回転量が概ね1000rpm少なく、世界トップ選手よりも同じく概ね1500rpm少なかった。一般的に競技力が高いほど、同じ速度であれば回転量が多い傾向が見られるため、回転量を増やす取り組みは、競技力向上を目指す際の一つの選択肢である可能性があると思われる。

備考(参考文献その他)

- ・村松ほか(2010), 世界ランキング50位以内のテニスプレーヤーの国際大会におけるサービス回転量について, スポーツパフォーマンス研究2: 220-232.
- ・村松ほか(2015a), 世界トップクラステニス選手のサービスにおける速度と回転量の関係について, テニスの科学23: 1-7.
- ・村松ほか(2015b), 世界トップクラステニ

ス選手のフォアハンドグラウンドストロークにおける速度と回転量の関係について、スポーツパフォーマンス研究 7 : 292-299.

- ・村上ほか (2016), ボール挙動測定器を用いたテニスのサーブのボール速度とボール回転数の解析の可能性, スポーツパフォーマンス研究, 8, 361-374.
- ・村松 (2017), テニスにおいて「強い」ボールの返球は「弱く」なりやすいのか?—大学生トップクラス選手における一例からの一考察—, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 56 (1) : 9-22.

第4回 7月11日

野口 和行

シーズンスポーツ「アウトドアレクリエーション」履修者のライフスキルの変容とその要因を探る

研究班1-1では、体育実技を通じたライフスキルの獲得に関する基礎的検討を行ってきた。本発表では、授業におけるどのような要素がライフスキルの変容に寄与しているかを検討するために、シーズンスポーツ「アウトドアレクリエーション」履修者を対象に、ライフスキルに関する質問紙調査、及びテキストマイニングによって、授業期間中に学生が記入したふりかえりシートの質的分析を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

1) 5日間の実習を通して、ライフスキルのうち「コミュニケーション」、「ストレスマネジメント」、「体調管理」、「最善の努力」、「礼儀・マナー」、「責任ある行動」、「謙虚な心」、「感謝する心」の項目で有意な向上がみられた。

2) 「コミュニケーション」に関する項目が向上した要因として、様々な場面で、他者と密接に関わりながら活動するという経験が、「ストレスマネジメント」、「最善の努力」に関する項目が向上した要因として、さまざまなストレスに向き合い、成し遂げることで得

た達成感が、「体調管理」に関する項目が向上した要因として、規則正しい合宿生活が、「感謝する心」に関する項目が向上した要因として、学生に直接関わってきたカウンセラーの存在が考えられる。

3) 非日常の環境の中で、さまざまなストレスに向き合い、それを達成するという経験と、その経験したことの意味をじっくり考え、ふりかえって言語化することが、曖昧で包括的な概念であるライフスキル全体の獲得に寄与している可能性が示唆された。

第4回 7月11日

村山 光義

超音波画像を用いた新たな押圧式筋硬度評価

近年、押圧式の筋硬度評価に超音波画像を用いる手法 (Views i : V_i) が開発されてきている。これは皮下組織および筋組織の変形具合を高解像度で画像化し、かつプローブ圧の同時計測により実際の変形評価の信頼性を高め、変位計測と変形圧の関係から組織の硬さを評価することが可能である。また複数の筋が層構造をなす部位において上層と下層の筋硬度を分離して評価できる可能性がある。しかし、その評価方法においてはいくつかの改善点が指摘できる。そこで、本研究はこうした超音波画像と荷重から筋硬度評価を行う新たな筋硬度評価方法の確立をめざし、ファントムゲルを用いた検討および、生体へのマッサージによる筋硬度変動に関して検討を行った。

ファントムゲルを用いた V_i の硬度評価は従来の押圧式筋硬度計と良好な対応関係が得られた。 V_i はさらに筋の層を区別した硬度評価が可能であった。筋の層構造を考慮すると、上層の筋硬度を分離して評価できることは従来の筋硬度計の弱点をカバーでき、有効な計測手法といえ生体での計測において十分活用できると考えられる。

また上腕二頭筋 (BI)、上腕筋 (BR)、2層全体 (ALL) の筋硬度についてマッサージ前

後で比較をした。マッサージは理学療法士によって軽擦法2分+揉捏法3分+強擦法3分+軽擦法2分を行った。安静時の筋硬度に関し、BIのひずみが30%となる荷重値から算出したBRとALLのひずみ(%)はそれぞれ 16.8 ± 6.3 、 $25.1 \pm 1.6\%$ となり、いずれもBIより小さく硬かった。Young率(kPa)もBIが 18.9 ± 5.7 、BRが 37.8 ± 18.0 、ALLが 22.5 ± 6.6 となり、BIがもっとも小さく柔らかい値であった。皮下組織は押圧に対してほとんど変形しなかった。つまり、本法による生体表面からの押圧に対し皮下組織、BI、BRの変形特性は異なり、下層のBRがBIよりも2倍程度硬く、また筋全体に対してBIの硬度は2割程度やわらかいことが示された。マッサージ後のひずみとYoung率は、BI、BR、ALLいずれもわずかに柔らかくなったが有意な変化は示されなかった。しかし、変化率はBRがBI、ALLよりも大きく、ひずみで19.2%、Young率で16.7%であった。本研究では安静状態に対しての処置であり、筋硬度の変動が小さかったと考えられる。しかし、上層のBIの方が手技の影響を強く受ける可能性があるのに対し、BIよりもBRの変動が大きかった。この点については運動負荷後のマッサージや他の部位での比較などから再検討する必要がある。

備考(参考文献・その他)

- 1) 村山光義, 内山孝憲, 田中寿志, 永田可彦, 米田継武, 超音波診断装置を用いた押圧式筋硬度評価に関する基礎的検討, 第71回日本体力医学会: 2016.9.24, Journal of Physical Fitness and Sports Medicine Vol.5 (6), 538, 2016
- 2) 村山光義, 稲見崇孝, 宮川博文, 内山孝憲, 米田継武, 押圧法による上腕二頭筋と上腕筋の筋硬度分離評価, 第72回日本体力医学会(2017.9発表予定)

第5回 10月17日

板垣 悦子

ピラティスは学生の健康づくりの一助と成り得るか?

「ピラティス」を受講する目的からピラティスに対する意識をさぐる一慶應義塾大学生とカリフォルニア州立サンノゼ大学生の場合一

本塾大学生がピラティスの知識や意識をどの程度持っているのかを「受講目的」の自由記述から分析 調査することで今後の授業展開の方法を検討することを目的とした。自由記述について、恣意的・主観的となることを極力回避するためにテキストマイニングの計量的テキスト分析(KHコーダー)を行った。またピラティスの発祥の地であるアメリカのS大学生についても分析の参考とするために併せて同様の調査をした。その結果、本塾大学生はピラティスの授業に対して体幹や筋肉を強化することを求めていることが明らかになった。またこれらの語は共起的にも繋がりが強く示された。この点はS大学生にも共通点が見られた。「ピラティス」に関わる事項は「習得する」はS大学生と同様に共起されているが、K大学生はほかの多くの語との共起はなく「健康作り」のみしか繋がっていなかった。従って、ピラティスが「体幹を鍛える」や「柔軟性を高める」ことなどは共起がみられないというK大学生の特徴が示された。今後の授業展開を検討するにあたり、学生が求めている体幹や筋肉を強化すること、学生がピラティスから様々な効果を共起できるようになることを課題として授業に取り組むことが重要であるといえた。

第5回 10月17日

鳥海 崇

ケンブリッジ大学におけるスポーツ文化について

2015年10月から2017年9月まで留学していた英国ケンブリッジ大学ダウニングカレッジ

で過ごした研究生生活について紹介した。ケンブリッジ大学は教育、研究の分野で世界中から注目を集める一方、スポーツの分野においても多数のオリンピック出場選手を排出しているのみならず、多くの学生が出場するボートレースがあり、またオックスフォード大学との世界最古の大学対抗戦があるなど、競技種目も競技レベルも多岐に渡っている。

2016年に実施されたりオオリンピックにもケンブリッジ大学の学生としてトライアスロンとボートの選手が出場している。またオックスフォード大学との対抗戦については最も歴史の古いボートレースは162回を数え、ロンドンのテムズ川を舞台に“The Boat Race”という名称で実施されている。また、有名なラグビーの対抗戦で、こちらは世界的に有名なラグビーの聖地であるトゥイッケナムスタジアムにおいて122回の歴史を有して“The varsity match”の名称で実施されている。また、ケンブリッジ市内を流れるケム川を舞台に実施される多くの学生が参加するボートレースは“The Bumps”と呼ばれ、31からなるカレッジの対抗戦として年に2回実施されている。ケンブリッジ大学は教育と研究だけでなく、このような歴史ある多様なスポーツの文化と共に歩んでいることは、今後の慶應義塾の進むべき方向性の指針となるべきものであろう。

第5回 10月17日

近藤 明彦

ドイツ、ケルン大学滞在報告

「ユース・スポーツと体育に価値は有るのか 一日独での認識の違い」のテーマで平成27年3月から1年間ドイツ、ケルン大学に於いて在外研究員として滞在した。

スポーツが持つユース年代に与える向社会的効果について英国のリー、ホワイトヘッドらが作成したYSVQ (Youth Sport Values Questionnaire；スポーツの価値観に関して

道徳、能力、地位の三要因で構成されている)をもとに日本語並びにドイツ語にそれぞれ翻訳した質問紙を用いて調査を行った。日本での調査をベースにしてドイツ語版質問紙の作成はケルン大学のボルフガング・ジャコビンスキー教授、ケルン体育大学のヨヒム・リュール教授、イエナ大学のディーター・タイペル教授の助力を得て行った。

調査はケルン、マインツ、イエナの地域スポーツクラブに所属するユース・アスリート250名を対象として行われた。

研究の成果は2017年7月にスペインのセビリヤで開催された第14回国際スポーツ心理学会において「SOCIAL ATTITUDE AND VALUE IN SPORT -COMPARATIVE STUDY BETWEEN GERMAN AND JAPANESE YOUTH ATHLETES-」の演題で発表した。また2018年3月にドイツ、エッセンで開催された第10回日独スポーツ科学会議においても「Specific attitudinal aspects towards sport in Japanese and German athletes」のタイトルで発表が行われた。

第6回 11月14日

市村 操一(筑波大学名誉教授)

ローランド・ナウル「オリンピック教育」(2016、大修館)に見る「オリンピックの精神の教育の歴史と現代の課題」

オリンピック教育は多くの側面を持っている。その発展の歴史は、少なくとも近代オリンピックの開設、つまりフランスのピエール・ド・クーベルタン男爵にまでさかのぼる。そしてクーベルタンが近代オリンピックで成し遂げたいと望んだことの背後にある教育的目的や思想は、体育の長い歴史に根ざしている。近代オリンピックの歴史の中で、オリンピック運動はさまざまな問題に取り組み発展をとげてきたが、オリンピック精神の教育という面は過去も現在も細々としたものであった。教育を通してのオリンピック精神の普及は学校の体育授業のなかでも、課外活動で

も、若者のスポーツクラブでも、現在のところ十分には行われていないようである。

「オリンピック教育」ではオリンピック運動を支えている精神が歴史的にどのように形成され、発展されてきたかを展望し、現代の課題について討論が行われているが、今回は、‘オリンピックゲームズーオリンピック教育ーオリンピック教育学’、‘オリンピック教育の歴史’ ‘オリンピック教育の振興’、‘オリンピック教育の教育学的概念と教授方法’、‘オリンピック教育の評価研究’を概観し、最後に、オリンピック教育の詳細の発展に要請されたことを述べた。

第7回 12月5日

加藤 幸司

ルール改正後のバドミントンの試合についての考察

BWF（世界バドミントン連盟）によるルールの改正が2006年に行われた。最も大きな変更点は、スコアリング・システムが従来のサービスポイント制からラリーポイント制へ移行したことである。その主なねらいはバドミントンのメジャー化へ向けたメディア対応のための試合時間の管理とプレーヤーの身体的生理学的負荷の軽減であった。このルール改正によってBWFの思惑は達成されたのであろうか。今回は、スコアリング・システム改正後初めて行われたオリンピックにおける女子シングルの試合の様相と試合時間について、試合時間、ゲーム時間、ラリー時間、ストローク数のデータを基に検討した。

結果は、1回戦から3回戦の平均試合時間は33.4分、準々決勝以上の試合は58.4分となった。平均ラリー時間と平均ストローク数についてもラウンドが上がるにつれて大きな値を示した。3回戦までの試合はどの項目も平均値を下回っていた。これは対戦選手間の実力差がより大きかったことが特に試合時間、ゲーム時間の長さに影響したと考えられ

た。全試合の平均試合時間は37.7分であった。ルール改正前、即ちサービスポイント制で行われた最後のオリンピック大会におけるデータと比較するとほとんど同値であった。従って、少なくとも女子シングルスについては、BWFの描いていた試合時間の短縮には至っていなかったと思われる。また時間的要因のみから推測されるプレーヤーの身体的、生理学的負荷は軽減されているとは言いがたく、今後さらに詳細な分析が必要であると考えられる。

第7回 12月5日

坂井 利彰

世界男子プロテニスツアーにおける早熟型と晩成型の育成モデル

スポーツにおいて長期目標（世界ランキング100位にランクインなど）を定めて達成するためには短期目標の達成の積み重ねが有効であるといわれているが、日本テニス協会が実施する強化指針では具体的な目標達成ステップは定められておらず、世界的にもそのような例はみられない。テニスは対人スポーツであり、タイムや距離などの記録を伸ばしていくスポーツよりも、長期目標を見据えた具体的な短期目標を設定しにくいという実情がある。

スポーツのパフォーマンスと年齢の関係についての研究は、年齢と適正な練習内容の関係や、加齢による身体能力の低下などというように特定の年齢時について検討するものが多く、選手キャリアの形成を目的とした各年齢時を統括的な視点で俯瞰する研究はこれまでに行われていない。

世界男子テニスに関する研究において、世界ランキング100位にランクインした年齢との選手の生涯最高ランキングが強く正の相関を示すこと、その要因としてATPツアーの構造が10代で100位にランクインした“早熟”な選手に有利に働いていることを明らかにした。

その結果は同時に、10代のランキングや出

場大会が後の選手キャリアを決定付けている可能性を示唆している。つまり、各年齢時の短期目標を設定し達成していくという過程は、選手のパフォーマンスを向上させるという目標達成理論における役割だけでなく、ATP ツアーの構造に長期目標の達成を阻まれないためにも不可欠であると考えられる。

世界ランキングだけでなく選手の成長過程などの指標を活用した研究の内容を多角的に考察した上で、研究実践として運営している慶應チャレンジャー国際テニストーナメントの活動を紹介。2020年の東京五輪以降は日本国内から数多くの晩成型選手が輩出されるための育成プランを『SAKAI METHOD』として提唱していきたい。

第8回 1月16日

石手 靖

BOA 事前キャンプを成功に導くための塾生の取組と課題

前回の本会では、2020東京オリンピック・パラリンピック開催で塾生に何を与えられ、残せるのかについて、2012ロンドンオリンピック・パラリンピックの英国内の大学の事例（ブリティッシュ・カウンシル調査）とBOAの事前キャンプ実施交渉から考えた。その結果として、オリパラ関連の活動に対して積極的に取り組んでいくべきであると主張した。

今回は、オリンピック教育とは何かを考え、慶應のスポーツの歴史を振り返り、塾生が取り組むこと自体がオリンピックレガシーであり、慶應レガシーであると提案した。ローラント・ナウルはオリンピック教育とは、①良い手本を示すこと、②健康な身体に健全な精神を宿すこと、③友情、平和、努力する喜び、連帯、意志の鍛錬、相互の敬意、生まれ育ちや皮膚の色や宗教で人を差別しないこと、公正さとフェアプレーの精神に基づく振る舞いや行動と述べている。

福澤諭吉は「身体健康精神活潑」という書を残し、活発な知的活動の前提として、肉体の健康を保つことの重要性を強調した。また、「体育の目的を忘るゝ勿れ」と題し、時事新報社説に学校教育における体育の本来の目的を説き、その目的を見誤ることがないように注意を促した。体育とは、「人をして不羈独立の生活を得せしむるの手段」、体育を口実として漫りに遊戯に耽り学業を怠り、あまつさえ肉体の強壮なるに任せて有りとあらゆる不養生を行い不品行を働き…と述べた。これは慶應義塾における体育、スポーツの原点であり、この精神は現在まで多くの塾員によって受継がれている（以上、慶應義塾体育会創立125年記念特別展より）。

2020を契機に慶應義塾、そして体育研究所の教育に役立てるべきことは、①スポーツの文化的価値の創造、②互いに語り、能力を高め合う関係の構築、③自身を知り、自己主張を繰り返すことによるリーダーシップの育成、④自国の文化や社会に対する造詣を深め、自身が社会に貢献できることの発見である。塾生が自ら動いていくことを応援したい。

第8回 1月16日

吉田 泰将

学習指導要領改訂に伴う中学校保健体育における武道（剣道）の授業内容の取扱いについて

平成24年4月より、中学校における保健体育の授業のカリキュラムに、武道が必修として組み込まれた。

全日本剣道連盟では、普及委員会の中に学校教育部会を立ち上げ、授業の展開について研究している。また全国剣道指導者研修会を開催し、剣道の授業実施を啓発している。必修化から5年を経過し、昨年3月には新学習指導要領が公示され、移行措置を経て、3年後に実施される。今回の発表では、「中学校における剣道授業の実施内容」について解説した。その内容は、新中学校学習指導要領に

準拠した安全で効果的な授業展開（ダイジェスト版第3版）にまとめられ、全日本剣道連盟より刊行された。

備考（参考文献その他）

一般財団法人全日本剣道連盟，学校体育実技「武道」指導資料「中学校武道の必修化を踏まえた剣道授業の展開」，2009

公益財団法人日本武道館・日本武道協議会「中学校武道必修化指導書」+ DVD，2017

第8回 1月16日

稲見 崇孝

2017年度浅野均一記念研究奨励金の報告

P37を参照

3. 大学体育指導者全国研修会報告

報告者：稲見崇孝

期 日：平成29年9月2日（土）～4日（月）

会 場：宮崎公立大学

（1）研修プログラム

■ 1日目（9月2日）

開校式

1-1. 特別講演

講 師：小林勝法（文教大学、全国大学体育連合専務理事）

「今後のスポーツ行政と大学体育・スポーツ」

1-2. 基調提案

講 師：西田明史（西九州大学短期大学部）

1-3. 模擬授業研修①

【健康づくりをめざした授業】

講 師：泉原嘉郎（福岡大学）

「コーディネーショントレーニング」

1-4. 模擬授業研修②

【スポーツ文化を対象とした授業】

講 師：蘭 和真（日本経済大学）

「バドミントン」

■ 2日目（9月3日）

2-1. 模擬授業研修③

【体力づくり（回復）をめざした授業】

講 師：笠井妙美（東海大学）

「ストレッチ、バランストレーニング」

2-2. 模擬授業研修④

【社会的スキルやコミュニケーション能力を高める授業】

講 師：杉山佳生（九州大学）

「レクリエーションバレーボール」

2-3. 模擬授業研修⑤

【実験・実習・調査が含まれる授業】

講 師：福満博隆（鹿児島大学）

「自転車エルゴメータによる有酸素能力の測定と評価」

2-4. 模擬授業研修⑥

【理論と実践が融合した授業】

講師：尾尻義彦（琉球大学）

「マラソン」

■ 3日目（9月4日）

3-1. 分散会

3-2. 全体会

閉校式

(2) 研修内容

1-1. 特別講演

2017年3月にスポーツ庁より発表のあったスポーツ基本計画に対して、大学体育・スポーツ関係者がどのような捉え方をすべきか、という内容であった。『一億総スポーツ社会』という新しいプランを「数で見る日本のスポーツ」としてスポーツ庁が動画でまとめているため、その紹介も合わせて行われた。大学スポーツが進むべき方針として、『スポーツが変える、未来を創る ～enjoy sports, enjoy life～』と題したシエーマが提示され、みる、する、ささえるスポーツ参画人口の拡大を、障がい者スポーツとともに展開する旨の発表があった。なお、本年度行われたユニバーシアード内でのカンファレンスにて、『Sports Friendly Campus』というテーマが取り上げられており、世界的に大学スポーツが注目を集めていることも述べられた。

1-2. 基調提案

本研修会で焦点を当てた『学士力』の獲得に関して問題提起が行われた。各々の専門家が在籍する大学の方向性（ディプロマポリシー）と体育・スポーツの価値を融合する仕掛けとして必要な6つの模擬授業形式のテーマを取り上げたことが提起された。具体的には、【健康づくりをめざした授業】、【スポーツ文化を対象とした授業】、【体力づくり（回復）をめざした授業】、【社会的スキルやコミュニケーション能力を高める授業】、【実

験・実習・調査等が含まれる授業】、【理論と実践が融合した授業】の6つであり、関連する専門家が紹介された。社会人基礎力の獲得を目的として近年注目される“ジェネリックスキル”に注目した研修であることが強調された。本研修では、例年の選択式研修会ではなく、全員が同一内容を受講し、模擬授業形式で進められるとの説明があった。模擬授業形式とは、60分で設定され、教員（講師）が授業の典型部分を実際の授業実践どおりに受講者（参加者）に対して行うものであり、15時間全体のことを単元と呼び展開された。したがって、冒頭15分は単元全体の説明と各時間の授業概要説明、その後30分の本単元典型授業部の実践、最後15分を質疑という形式である。

1-3. 模擬授業研修①

【健康づくりをめざした授業】

コーディネーショントレーニング

ドイツにおいて幼少期から実践されているコーディネーショントレーニングが取り上げられた。脳から末梢への回路づくり、神経系への最適な介入時期が幼少期であることを前提に、いくつかの協調運動が紹介された。基本的には1人で行う運動から、2人一組への展開で、手足を使った運動からボールなど器具を使った運動へと移行する。コーディネーショントレーニングは、反復練習によって神経回路が構築されるが、ルーティン化された際には脳神経活動の活性化が劣るため、常に新たな課題を提供する必要性も述べられた。

1-4. 模擬授業研修②

【スポーツ文化を対象とした授業】

バドミントン

単元の初回授業が取り上げられた。バドミントンの歴史を、特にラケットやシャトルが

どのように作られ、そして発展してきたかを、実際に100年以上前に使われていたラケットを提示しながら授業を展開された。約20gずつ軽くなってきたラケットの歴史に関して、使われていた木材の特徴などから当時の時代背景を読み取り教示し、さらには器具が進化した過程をバドミントン技術の段階的な指導に重ね合わせるためには、打ってもまっすぐに飛ばないシャトルを使用するなどの工夫が必要であることが述べられた。

2-1. 模擬授業研修 ③

【体力づくり（回復）をめざした授業】
ストレッチ、バランストレーニング

近年の学生の体力レベルを“回復”させる手立ての一つとして実践されている授業が紹介された。毎回の授業でウォーミングアップとして必ず行われるストレッチングを、広く普及するスタティックストレッチングと、より高い可動性が得られるダイナミックストレッチングの2つの観点から紹介され、毎授業にて長座体前屈距離を測定し、記録をノートに記載させ、追跡させることで柔軟性の獲得に寄与することを教示する方法が示された。

2-2. 模擬授業研修 ④

【社会的スキルやコミュニケーション能力を高める授業】
レクリエーションバレーボール

レクリエーションバレーボールを通じて社会的スキルを学ぶ授業が紹介された。リーダーシップスキルやコミュニケーションスキルなどを含めた社会的スキルの獲得プロセスが、運動スキル獲得のためのプロセスと類似するため、練習と振り返りの繰り返して上達するとの説明があり、特に“チャンネル”と呼ばれる非言語的な情報（表情や位置）を読み取るスキル獲得の必要性を述べられた。

2-3. 模擬授業研修 ⑤

【実験・実習・調査等が含まれる授業】
自転車エルゴメータによる有酸素能力の測定と評価

学生が体育・スポーツ、強いては運動に興味関心をもつための取り組みのひとつとして、近年開発が進む種々の心拍計測デバイスを用いた授業が紹介された。従来実施されている自転車エルゴメータによる有酸素能力の測定はそのままに、運動中の心拍をリアルタイムモニタリングさせることで自身の運動応答を知り、負荷強度と心拍数の直線関係（PWC170）から自身の有酸素レベル（最大酸素摂取量）に関するグラフを作成し、推定させる授業であった。

2-4. 模擬授業研修 ⑥

【理論と実践が融合した授業】
マラソン

“運動・スポーツ科学演習（マラソン）”という講義名で実際に行われている授業が紹介された。腕時計型の心拍計測デバイスを用い、学外の遊歩道にてペースコントロールする授業風景が紹介されたあと、実際に体育館内をランニングした。デバイスによる客観的な値とBorgスケールによる主観的な値の関係を理解するため、適宜休息を挟みながらランニングスピードを段階的にコントロールし、時速8 km/hまでのペース走を参加者全員が体験した。

3-1. 分散会

分散会では、6つのテーマの中から2テーマを選択し、各30分間の質疑応答と自身が行う授業にどのように展開させるか？が議論された。報告者は、【社会的スキルやコミュニケーション能力を高める授業】と【理論と実践が融合した授業】を選択した。前者では、

社会的スキルの獲得の有無をどのような方法にて評価するかが議論された。心理学領域で用いられる質問紙が用いられる場合、単元前後においては急峻な変化が確認されている(すなわち体育の授業を通じて社会的なスキルが獲得できたことを意味する)が、単元終了後、つまり授業が終わってからはベースラインまで回復することも事例的に確認させているため、継続した体育履修の必要性が示唆された。後者では、本授業受講者は、那覇マラソンにランナーとしてはもちろん、ペース走役や会場運営スタッフとして携わるなどの発展的かつ社会とつながりができる要素を含んでいることが指摘され、体育授業の受講者の今後にどのような影響を及ぼすのか、そしてどのような影響を及ぼすべきなのか?が議論された。

3-2. 全体会

実行委員長より、本研修会全体の総括がなされ、使用されたスライドを納めたUSBが配布された。本研修会には全国各地の教員53名が参加した。

4. 浅野・所内・学事・小泉基金報告書

① 浅野均一記念研究奨励金

研究課題

水泳飛込競技におけるジュニア代表強化合宿中の身体後面筋柔軟性の経時変化と従来指標との関係

研究代表者 稲見崇孝

補助額 300,000円

【Introduction】 Over a 3-year period, an elite 13-year-old diver's strength increased, along with height and weight, but flexibility of the posterior muscle group of the lower limb (PML) (e.g., hamstrings and triceps surae muscle) did not increase [1]. Flexibility decreases when muscle stiffness temporarily increases because of overuse, such as during intensive training, making disorders (e.g., low back pain) highly likely to occur [2]. On the other hand, during training camps, jumping into a pool occurs repeatedly; thus, muscle stiffness in the anterior muscle group of the lower limb (AML) (e.g., rectus femoris [RF], vastus lateralis [VL] and tibialis anterior [TA]) may also increase. To verify this hypothesis, we examined flexibility changes, including AML muscle stiffness, during a training camp for junior elite divers. **【Methods】** Eleven male and female elite divers from Japan's national junior team (13—17-years-old) participated. Shear wave elastography was used to measure muscle stiffness, indicative of muscle flexibility, of the RF, VL, semi-tendinous muscle [SM], TA, and gastrocnemius medial head (GM). Measurements were taken before the training camp (PRE), and on training camp days 1 (D1) and 2 (D2). Two-way (time × muscle) repeated measures ANOVA, and subsequent multiple comparisons (Bonferroni post-hoc tests) were used to compare PRE, D1, and D2

measurements for each individual muscles.

【Results】 The shear modulus (kPa) of each muscle in the PML (SM, GM) increased significantly from PRE to D2 ($P < 0.05$). Similarly, the shear modulus of AML muscles (RF, VL, TA) also increased significantly from PRE to D2. An inter-muscle difference (normalized to PRE) was detected between the RF and SM at D2.

【Discussion】 The shear modulus measurements for the PML muscles were largest on D2; similar results were obtained for the AML muscles. This suggests that muscle stiffness changes do not occur only in the PML; thus, information on the AML muscles should be added to the muscle condition check.

References

- 1) Narita et al. (2012) Rigakuryoho Kagaku, 27 (6): 629-633.
- 2) Ohkubo et al (2008) MB Med Rehabil, 96: 28-32.

本研究課題に関する発表

2018年7月に Dublin にて開催される2018 European College of Sports Science において、『Time-dependent flexibility changes during a training camp for junior elite divers』のタイトルにて発表を予定しています。

Inami, T.¹, Narita, T.², Yoshimura, A.³, Yonezu, T.³, Yamazaki, E.⁴, Orikasa, Y.⁴, Ohtani, M.⁵, Hirose, N.³, Murayama, M.¹

1 Keio University, 2 Health Science University, 3 Waseda University, 4 Sasamoto Orthopaedic Surgery, 5 Wakayama Medical University

② 所内研究費

研究課題

スポーツ政策に関する基礎的検討 #2

研究代表者 加藤大仁

補助額 293,110円

2016年夏に開催されたりオデジャネイロオリンピックでは、連日のように日本人選手の活躍が報道された。この冬開催された平昌オリンピックでも、日本選手団の活躍は目覚ましく、両大会とも日本選手団によるメダル獲得数は過去最多を記録した。加えて、パラリンピックでの日本選手団の活躍にも言及しておくべきだろう。2000年代半ば以降、オリンピックやパラリンピックをはじめとする国際大会で日本人選手が躍進してきた背景には、スポーツ立国論やスポーツ基本法の制定を背景としたトップアスリートに対するサポートがあったことは言うまでもない。

また、2015年にスポーツ庁が発足したこともあってか、2020年東京オリンピックでのメダル獲得目標について具体的な数字を挙げる政府関係者もいる。因みに、JOC は国別金メダル獲得数のランキングでトップ3入りすることを目標として掲げており、山下泰裕強化本部長はあくまで個人的な見解と断ったうえで、「金メダルを30個以上」を目標にしたいと述べている。

ところで、2016年8月22日朝のNHKの番組では、オリンピックを開催するメリットとして、①国威発揚、②国際的存在感、③経済効果、④都市開発、⑤スポーツ文化の定着の5点が挙げられていた。しかし、そもそもオリンピック本来の目的はオリンピズムの推進である。この辺り、完全に国際的な商業イベントと化した現在のオリンピックに内在する理想と現実のギャップを見て取ることもできるだろう。

何れにせよ、我が国のスポーツ政策を考えるに当たって大切なのは、東京オリンピック後を見据えることである。現在、あらゆる政

策領域で「2020年までに」という言葉がある意味合言葉のように使われている。しかし、長期的な計画となるとどうだろうか？ 東京オリンピック開催に合わせて建て替えが決まっていた国立競技場の建設費を巡り、2014年から2016年にかけて混乱が生じ社会問題化したことは記憶に新しいが、仕切り直しとなった後も、陸上用のサブトラックが常設できないことが明らかとなり、将来的には球技専用競技場になることが閣議決定されるなど、想定外の事態が続いているといえよう。

より日常的な課題に目を向けると、「ブラック部活動部」なる言葉に象徴されるように、ここ数年学校での部活動のあり方が問われている。実際、スポーツ庁は今年3月に「部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を発表して、合理的・効率的な部活動の在り方を目指す方向に舵を切っている。我が国の部活動を巡っては、学校制度の下でスポーツ活動を行っている国々、とりわけアメリカと比べた際にその不合理さが指摘されることが多かっただけに、このようなガイドラインが作成されたこと自体大きな前進と言えるだろう。しかし、その一方でスポーツ統括団体によるガバナンスの在り方については手付かずのままという印象は拭えない。この辺り、日本版NCAAの創設に向けた議論を含め、今後の動向にも注目したい。

③ 学事振興資金

研究課題

サッカーの試合中における動きの特性と体力テストとの関係

研究代表者 福士徳文

補助額 300,000円

【目的】 スポーツのトレーニングや練習に、科学的根拠のある方法を用いることが積極的に推し進められているが、指導現場において最も身近で簡便な科学的アプローチは、体力テストによって選手の体力や能力を定量化す

ることである。しかしながら、サッカー競技のような球技系種目では、明確な競技力の定義や定量化が難しく、どのような体力テストがどの程度利用できるかは不明である。本研究は、指導現場で活用できる体力テスト項目を提案するために、GPS デバイスを用い実際の試合中の動きの特性から体力的な要素を抽出し、体力テスト結果との関係を明らかにすることを目的とする。

【方法】 被験者は、男子大学サッカー部員33名(19.9±1.07歳)であった。体力テスト項目は、50m走(10, 20, 30, 40m各通過タイム)、垂直跳び、バウンディング、立ち幅跳び、アロウヘッド・アジリティーテスト、Yo-Yo intermittent recovery test level2 (YYIR2)、の計6種目であった。試合中における動き(ランニング)の測定には、15HzGPS デバイス(SPI-Pro X2)を用いた。抽出した項目は、トップスピード(km/h)、総走行距離(m)、スプリント(24km/h≤)回数、高強度(15km/h≤)走行距離(m)、スプリント(24km/h≤)走行距離(m)、の5項目であった。統計処理は、ピアソンの積立相関係数を用い、体力テスト結果と試合中から抽出した動きの項目間の関係を検討した。なお、統計的有意水準は5%未満とした。

【結果】

トップスピードと20m($r = -0.346, p < 0.05$)、30m($r = -0.409, p < 0.05$)、40m($r = -0.463, p < 0.01$)、50m($r = -0.509, p < 0.01$)、スプリント回数とYYIR2($r = 0.452, p < 0.01$)、スプリント走行距離とYYIR2($r = 0.444, p < 0.01$)間で有意な相関関係がみられた。

【結語】 サッカーにおいて、高強度運動を頻回に繰り返す間欠的能力は非常に重要な体力要素として挙げられており、また高いスプリント能力は競技パフォーマンスに関わる。本研究のように、サッカーの試合中における動きの特性から体力テストを捉えた場合に挙げ

られた2種目も、間欠的能力を反映するYYIR2、スプリント能力を反映する50m走であった。したがって、これら2種目は現場で活用していくべき種目であると考えられる。今後は、その他の体力テストの利用やデータ数を増やすなど、さらに検証していく。

研究課題

ボールゲーム熟練者の多物体追跡課題における特徴に関する研究

研究代表者 永田直也

補助額 200,000円

サッカーやバスケットといったボールゲーム熟練者は、多数の物体を追跡して課題に合った判断をするための情報を取得しているが、そのシステムは明らかになっていない。そこでこのシステムの解明を目指す研究の1年目として、ボールゲーム熟練者と非熟練者の比較を実施した。本研究では、ボールゲームを競技として実施していた熟練者とボールゲーム外のスポーツを競技として実施していた非熟練者を対象とした。測定では、対象者に注視している画面中央の変化に対応する課題とディスプレイ上で移動する複数の物体間の変化に対応する課題を同時に行うように求められた。物体は、連なった状態で配置され、それらは移動とともに間隔を急速に変化するよう設定した。実験条件は、注視点の変化と物体間の変化が同時に起きる条件と異なったタイミングで起きる条件を設定した。分析は、変化に対応した正答率を2課題、2条件で算出し、熟練者・非熟練者の群内・間で比較した。

測定の結果、ボールゲーム熟練者と非熟練者間の物体変化に対する成功率に違いが認められ、ボールゲーム熟練者が高い正答率を示した。一方で、注視点の変化に対する正答率、両群内における両実験条件での正答率の比較には差が認められなかった。このことからボールゲーム熟練者は、ある物体を注視しな

がら他の物体を追跡し変化を認知する2重課題を、非熟練者よりもより良く行うことができることが示唆される。今後は、熟練者が上手く課題を実施できる場面とできない場面を明らかにし、メカニズムの解明に迫っていく。

研究課題

フルマラソン後に材質変化する筋を特定する

研究代表者 稲見崇孝

補助額 200,000円

We sought to identify changes in individual muscle hardness after a full marathon and to track time-dependent changes using ultrasound strain elastography (SE). The use of ultrasound elastography to assess muscle hardness has been increasing in recent years. Several different ultrasound elastography methods are currently in use, including SE and shear wave elastography. These ultrasound-based techniques are capable of capturing the distribution of hardness and stiffness within individual muscles, and thus show promise for direct measurement of the mechanical properties of individual muscles. In this study, twenty-one collegiate marathon runners were recruited. Muscle hardness (i.e., strain ratio, SR) was measured using SE for the rectus femoris (RF), vastus lateralis (VL), biceps femoris long head (BF), tibialis anterior (TA), gastrocnemius medial head (GM), and soleus (SOL) muscles at the following time points: pre (PRE), immediately post (POST), day-1 (D1), day-3 (D3), and day-8 (D8), after a full marathon. We found that the SR decreased after the full marathon (i.e., the muscle became harder), and that the lowest SR across all measured muscles was observed on D1. Although there was no difference in the magnitude of change in SR

between the muscles of the thigh, that of the MG and SOL were significantly larger than that of the TA. Muscle hardness in the VL, BF, and SOL recovered at D8 (i.e., non-significant difference from PRE), whereas recovery of RF and GM hardness at D8 was not observed. Thus, the degree of change in muscle hardness does not occur uniformly within the lower extremity muscles. In particular, changes in muscle hardness of the TA after a full marathon is small compared with other muscles and time-dependent changes in each muscle varies during recovery. The features of muscle hardness identified in this study will be useful for coaches when mentoring runners on proper forms and for training advisers and therapists who seek to address deficiencies in running.

本研究課題に関する発表

Journal of Strength and Conditioning Research に『Tracking of time-dependent changes in muscle hardness after a full marathon.』のタイトルにて投稿、受理されました。現在、掲載手続き中です。

Inami T¹, Nakagawa K^{2,3,4}, Yonezu T⁵, Fukano M², Higashihara A², Iizuka S², Abe T², Narita T⁶.

1 Keio University, 2 Waseda University, 3 The University of Tokyo, 4 JSPS Japan, 5 Tokai University, 6 Health Science University.

④ 小泉基金国外出張補助

研究課題

バスケットボールフリースローにおける準備行動の一定性の影響

研究代表者 永田直也

補助額 247,600円

課題動作前に行うプリ・パフォーマンス。ルーティン (PPRs) は、実施者の心身を最適

な状態にするための準備動作として行われる。Cohn (1990) は、PPRs の効用として、PPRs の一定の動作がスキーマに作用し、動作の再現性を高めるとしている。本研究では、少人数を対象として、この PPRs と課題動作の再現性について検討を行う。本研究の目的は、PPR の動作が一定である場合、課題動作の変動が少ないという仮説を検証することである。

対象者は、大学生バスケットボール選手6名(競技歴:9.00±0.89年)であった。本研究では、シュート成功率を記録し、対象者シュートハンド側の手と腕の動きは2台のカメラを用いて記録した。記録した動作は、3次元動作解析システムを用いて分析した。6名のうち3名は、普段実施している準備行動の条件 (consistent preparation behavior; CPB) とまったく準備行動をしない条件 (no preparation behavior; NPB) でそれぞれ20本のフリースローを実施した。残りの半数は、普段実施している準備行動の条件とまったく研究者が設定したランダムな準備行動をする条件 (random preparation behavior; RPB) でそれぞれ20本のフリースローを実施した。各試技間は、1分のインターバルを設定した。

各条件でのシュート成功率は次のとおりである、CPB:56.67±0.18%; RPB:63.33±0.13%; NPB:39.76±0.22%だった。また、ボールリリース時の手関節角度・肘関節角度の変動係数は次のとおりである、CPB vs. RPB:0.51±0.41% vs. 0.57±0.67%、0.10±0.08% vs. 0.15±0.09%; CPB vs. NPB:0.39±0.13% vs. 0.39±0.24%、0.12±0.06% vs. 0.13±0.09%。

本研究では、CPB条件とRPB条件では、CPB条件のCVはRPB条件のものよりも値が小さかった。しかし、ベクター角に関しては、CPBの値はRPBと比べて、変わらない、または小さい値を示した。Lonsdale and Tam (2008) は、NBAカンファレンスセミファイナルにおいて、通常のルーティンに動作(普

段ではしない場面で深呼吸する)が加わった場合にシュート成功率が低下していたことを報告している。本研究では、手続き上でない新たな動作を加えるのではなく、既存の動作の回数を加減していた。このことから、実験条件においてドリブル回数が増加するといった準備動作の小さな変化は、課題動作の一定性に影響を与えないかもしれない。

本研究課題に関する発表

NAGATA, Naoya. "Effect of consistent preparation behavior in basketball free throw", The 22nd Annual Congress of the European College of Sport Science, Germany, July, 2017.

研究課題

Qualitative evaluation of pole walking exercise using monitoring camera images

研究代表者 山内 賢

補助額 195,200円

ポールウォーキングは、2本のシャフトを使って、歩行を力学的、心理的、そして体力的にサポートする歩行スタイルである。最初は、歩行に障害がある患者の歩行矯正のトレーニングやリハビリテーション種目として、日本で発案された。加えて近年では、老若男女問わず、郊外で楽しむことができるフィットネスウォーキングの任意種目としても注目されている。研究レベルにおいては、単純な歩行と比較して、歩行活動を効果的に改善することが知られている。また、歩行能力の程度は、日常生活活動に関連した評価および健康寿命延長のパラメータとして応用されている。

近年の研究では、動作の画像記録を解析して学習者にフィードバックする試みが数多く報告されている。その中で歩容は、歩行能力の評価に適用可能であり、医療をはじめリハビリテーションやフィットネスウォーキング分野等で動作(姿勢)観察の指標として活用

されている。しかし、歩行動作の解析に映像を用いる場合に、記録装置が存在するというストレスは、通常の動きと比較して異なる動きを引き起こす可能性がある。そこで、高齢者養護老人ホームで常設されている監視カメラが知覚記録システムやインテリジェンス機能を有していることに着目して、監視カメラことによる、ポールウォーキングの歩容評価を試みた。本研究の目的は、学習者にストレスを与える可能性が軽減できる監視カメラを用いて、ポールウォーキング実施による「運動効果、動作変化を定量評価する方法」と「画像から現象学的に考察する定性的な歩容観察」を組み合わせた歩容評価を提案することである。歩行能力を評価することにおいて、歩数、歩行時間、歩行距離、運動負荷、運動消費量等の測定値を用いることがある(量的評価)。ただし、量的評価は、測定時における歩行の様相は無視している。そこで研究者らは、高齢者の歩行能力の評価に量的評価だけでは不十分と考え、量的評価に歩行動作の様相である質的評価を加えることを提案した。動作の評価は、観察を伴う現象学や運動学の分野であり、高齢者の歩行能力をさらに詳しく査定できる。監視カメラによる分析は、量的評価に隠れている記録を発見できるので、記録として残らない「見えないものを見える化する」ヒントや歩行能力改善のカウンセリングをより明確にする(観察眼の発生)。ポールウォーキング教室を一定期間行った効果測定項目は、気分尺度、体組成、筋力、反応時間、歩行速度、歩幅、歩率、歩行比、歩行および立位姿勢である。その中で、映像より単眼計測法を用いて算出、および観察できる質を合わせた評価は、歩行速度、歩幅、歩率、歩行比等の歩容および歩行姿勢とした。

監視カメラは、手持ち式のカメラで構えて撮影するムービーとは異なり、そもそも設置されているので、記録されているという歩行者のストレスを軽減することができた。ポール

ウォーキングをすることにより脚を運ぶ歩行を繰り返したので、速歩能力は、速度の増加傾向、ケイデンスが増加するダイナミックな（力強い）歩行が誘発される一過性の効果があらわれた。

本研究課題に関する発表

Australian Association of Gerontology
Conference Program, P22. (2017年11月)

Ⅲ. 教育活動記録

(教育委員会)

Ⅲ－１．授業の実施

本年度の履修者の集計結果は、体育科目全体の履修者数が5902名（前年比－856名）となった。以下に詳細な履修者統計を示し、本年度教育活動の報告と次年度に向けた課題を挙げる。

１．2017年度体育科目の履修者統計

1) 体育学講義と体育学演習

2017年度は、体育学講義9コマ（前年比＋1）、体育学演習1コマ（同比同数）を開講した。体育学講義のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-1に、体育学演習のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-2に示す。履修者数の合計は、体育学講義で348名（前年比＋10.5%）、体育学演習で14名（同比同数）であった。体育学講義は、4年連続で10%以上の履修者増となっている。これは、東京オリンピック・パラリンピックが決まり、教養としての体育・スポーツ科学に注目が集まっているためであ

ろう。この塾生の興味に対し、体育・スポーツ科学の多様な側面を伝えられるような授業を展開していくことが重要であるだろう。

2) 体育実技 A・B

表Ⅲ-1-3に体育実技A（ウィークリースポーツクラス）の担当者とそれぞれの担当種目、表Ⅲ-1-4に体育実技A（ウィークリースポーツクラス）の種目別履修状況を示す。表Ⅲ-1-4に示すように、日吉・三田・芝共立合計で5870名の申込（前年比－11.3%）に対し、最終的に5376名の履修者（同比－12.5%）となった。定員に対する充足率は、全体で65.5%となり、前年を12.5%程下回った。また、三田・芝共立キャンパス設置科目は、合わせた充足率が41.9%となった。より詳細な分析によると、今年度は全学年において履修者が減少していることがわかった。これは、昨年度に引き続いて在校生のみならず、新入生に対しても体育の啓蒙活動が不足していたことが考えられる。これまでは、新入生に対して

表Ⅲ-1-1. 2017年度 体育学講義のタイトル及び担当者

講義名	担当者	コマ数			履修者数
		春	秋	計	
スポーツの効用を科学的にみる（スポーツ総論）	村山光義・佐々木玲子・吉田泰将	1		1	7
スポーツ心理学の世界	近藤明彦	1		1	68
スポーツと身体（からだ）の基礎理論	吉田泰将	1		1	135
スポーツ現場のコーチングと安全教育	山内 賢	1		1	12
スポーツコーチング概論	坂井利彰	1	1	1	19
スポーツの技と文化を探る	村山光義・植田史生・村松 憲		1	1	6
スポーツの数理統計学	鳥海 崇		1	1	2
スポーツパフォーマンスと心理学	永田直也		1	1	85
健康と運動の科学	山内 賢・奥山静代・横山裕一・井ノ口美香子・有馬ふじ代		1	1	14

表Ⅲ-1-2. 2017年度 体育学演習のタイトル及び担当者

講義名	担当者	コマ数			履修者数
		春	秋	計	
スポーツ現場における救急法の基礎	山内 賢		1	1	14

体育授業を広報するパンフレットを作成し、
 新入生・在校生に対してはホームページの機能
 を充実させることで煩雑な履修の行程をわ
 かりやすくした。しかし、ここ数年履修者が
 減少していることを考えると、原因分析と新
 たな対策を考えていく必要がある。

表Ⅲ-1-5に体育実技B（シーズンスポー
 ツクラス）の各種目の担当者及び履修状況を

示す。2017年度は8種目（前年比－1）を開
 講した。履修者数は164名（前年比－41.9%）
 で、充足率は47.3%（同比－25.6%）になっ
 た。今年度は、シーズンスポーツにおいても履
 修者数に大きな減少がみられたことから、そ
 の原因分析と、魅力ある授業内容の再検討を
 図る必要がある。

表Ⅲ-1-3. 2017年度 体育実技A・B（ウィークリースポーツクラス）担当者及び担当種目

	担当者	種目
教 授	近藤 明彦	陸上競技, ジョギング, ウォーキング, フィットネストレーニング
〃	佐々木 玲子	エアロビクス
〃	植田 史生	剣道
〃	石手 靖	バレーボール
〃	村山 光義	フライングディスク, ニュースポーツ, インドアスポーツ
〃	加藤 大仁	バスケットボール
〃	村松 憲	テニス
准 教 授	山内 賢	ハンドボール, フィットネストレーニング
〃	吉田 泰将	剣道, ソフトボール
〃	板垣 悦子	ボディコンディショニング（ピラティス）
〃	加藤 幸司	バドミントン
〃	須田 芳正	サッカー, フットサル
〃	野口 和行	バレーボール, ニュースポーツ, バックカントリースキル（バックパッキング, カヤック）
専 任 講 師	鳥海 崇	水泳, 水球
〃	奥山 静代	ボディコンディショニング（エアロビクス&ヨガ）, ボディメイクエクササイズ
〃	坂井 利彰	テニス
〃	永田 直也	バスケットボール
助教（有期）	福士 徳文	フットサル
〃	稲見 崇孝	フィットネストレーニング
非 常 勤 講 師	赤井 宏司	ソフトテニス
〃	朝飛 大	柔道
〃	浅海 友峰	フットサル
〃	厚母 宗子	太極拳
〃	五十嵐 元	バレーボール
〃	池田 知弘	自動車
〃	池本 和隆	水泳
〃	石渡 千草	ソフトボール
〃	伊藤 恭二	弓術
〃	伊藤 洋平	フットサル
〃	上野 優子	フィットネストレーニング
〃	梅本 雅之	水泳

	担当者	種 目
非常勤講師	小野寺和也	野球
〃	風間 善明	軟式野球
〃	勝又 正浩	ゴルフ
〃	金指みの利	バレエエクササイズ
〃	川嶋 弘文	卓球（ピンポサイズ）
〃	木塚 孝幸	バスケットボール
〃	木林 弥生	卓球
〃	久保田正美	空手
〃	河乃 建仁	気功
〃	佐藤 達也	アーチェリー
〃	四戸 紀秀	フットサル
〃	島田桂太郎	ボクシング
〃	首藤 聡史	器械体操
〃	杉本 亮子	ボディコンディショニング（ヨガ&ピラティス）
〃	鷺見 全弘	水泳
〃	竹村りょうこ	テニス
〃	田中 雅子	エアロビクス
〃	竹生 淑子	フェンシング
〃	藤平 信一	合気道
〃	鳥屋 智大	テニス
〃	中田 大輔	トランポリン
〃	野沢 絵梨	テニス
〃	原 莊太郎	テニス
〃	平野 泰宏	バドミントン
〃	弘 卓三	フィットネストレーニング
〃	布川友紀子	ゴルフ
〃	細野 雅歳	バレーボール
〃	宮本 千晶	テニス
〃	宮脇 利行	卓球
〃	矢作 拓也	バレーボール
〃	綿田 博人	ゴルフ

表Ⅲ-1-4. 2017年度 体育実技A・B（ウィークリースポーツクラス）種目別履修状況

地区	科目名	定員	登録数	倍率	最終履修者数	充足率
日吉地区開設	アーチェリー	88	106	1.20	84	95%
	合気道	60	49	0.82	54	90%
	ウォーキング	60	0	0.00	1	2%
	エアロビクス	240	184	0.77	201	84%
	空手	56	18	0.32	19	34%
	器械体操	20	14	0.70	16	80%
	気功	120	121	1.01	99	83%
	剣道	200	30	0.15	30	15%
	ゴルフ	256	246	0.96	199	78%
	サッカー	470	278	0.59	278	59%
	自動車	120	115	0.96	109	91%
	柔道	120	22	0.18	23	19%
	ジョギング	30	8	0.27	9	30%
	水泳	360	180	0.50	191	53%
	水球	40	9	0.23	9	23%
	ソフトテニス	40	19	0.48	20	50%
	ソフトボール	192	174	0.91	165	86%
	太極拳	60	47	0.78	50	83%
	卓球	378	268	0.71	251	66%
	テニス	800	651	0.81	604	76%
	トランポリン	30	52	1.73	30	100%
	軟式野球	60	32	0.53	36	60%
	ニュースポーツ	100	31	0.31	56	56%
	バスケットボール	550	487	0.89	407	74%
	バックカントリースキル（バックパッキング）	14	3	0.21	3	21%
	バックカントリースキル（カヤック）	14	3	0.21	3	21%
	バドミントン	308	452	1.47	280	91%
	バレエエクササイズ	120	114	0.95	94	78%
	バレーボール	758	474	0.63	464	61%
	ハンドボール	60	24	0.40	26	43%
	フィットネストレーニング	480	358	0.75	351	73%
	フェンシング	44	25	0.57	30	68%
	フットサル	550	369	0.67	380	69%
フライングディスク	50	26	0.52	26	52%	
ボクシング	160	74	0.46	75	47%	
ボディコンディショニング（エアロビクス&ヨガ）	80	100	1.25	70	88%	
ボディコンディショニング（ピラティス）	160	191	1.19	154	96%	
ボディコンディショニング（ヨガ&ピラティス）	100	136	1.36	94	94%	
野球	120	78	0.65	77	64%	
陸上競技	20	4	0.20	5	25%	
日吉合計		7488	5572	0.74	5073	68%
三田地区開設	テニス	224	121	0.54	120	54%
	バレーボール	100	17	0.17	17	17%
	弓術	100	63	0.63	61	61%
	剣道	80	16	0.20	16	20%
	合気道	60	42	0.70	57	95%
	三田合計		564	259	0.46	271
芝共立地区開設	ボディメイクエクササイズ	80	33	0.41	33	41%
	インドアスポーツ	80	16	0.20	15	19%
	芝共立合計		160	49	0.31	48
全体合計		8212	5880	0.72	5392	66%

表Ⅲ-1-5. 2017年度 体育実技A・B（シーズンスポーツクラス）担当者及び履修状況

月	科目名	担当者	定員	登録数	倍率	最終履修者数	充足率
8月	マリンスポーツアクティビティ	鷲見 全弘	25	22	0.88	24	96%
	馬術	高見 幸生	32	31	0.97	31	97%
	山岳「Nature & Trail」	溝渕 明	25	5	0.20	5	20%
	セーリング	金子 隆司	25	9	0.36	9	36%
	ビーチバレー	石手 靖	30	22	0.73	24	80%
9月	アウトドアレクリエーション	野口 和行	50	7	0.14	8	16%
2月	スキー	吉田 久男	120	29	0.24	32	27%
	スケート	小山 正	40	27	0.68	31	78%
計			347	152	0.44	164	47%

2. 授業評価の実施

体育研究所では、体育実技を履修した学生による授業評価を長年継続的に実施し、より適切な授業展開のための基礎資料を得て、授業改善に取り組んでいる。専任教員に加え、非常勤講師（ウィークリースポーツ）においても平成23年度秋学期より web 方式によるアンケートの回収を継続している。

実施に際してはこれまでと同様に、授業終了2週間前より入力可能として、回答人数を把握することにより、未実施者に対しては残りの授業で実施を促した。

以下、集計を行った。表Ⅲ-1-6はアンケート回答者数、表Ⅲ-1-7、8にはアンケート調査用紙の質問項目を示した。アンケートの各質問項目には「強くそう思う」（5点）、「そう思う」（4点）、「どちらとも言えない」（3点）、「そうは思わない」（2点）、「全くそう思わない」（1点）の5段階で回答させ、得点化して評価した。Web方式によるアンケ-

ートでは、回答の時間に制限がないため、自由記述に意見を書きやすいというメリットがあるが、回答率は紙面方式より低下しているのが現状である。引き続き、各教員が積極的にアンケートへの回答を促す努力を続けなければならぬ。

表Ⅲ-1-6. 授業評価アンケート回答者数

	アンケート総数
春学期ウィークリー	747
秋学期ウィークリー	272
春学期講義・演習	36
秋学期講義・演習	11
シーズン	28

表Ⅲ-1-7. 授業評価アンケート質問項目（講義・演習・実技）

履修者全員（講義・演習・実技）回答	
設問1	曜日時限を選択してください
設問2	実施地区を選択してください
設問3	自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した
設問4	教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した
設問5	教員の指導・教授方法は適切であった
設問6	教員はこの授業についての十分な知識を持っていた
設問7	教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した
設問8	教員の話し方は聞き取りやすかった
設問9	この授業は塾生にとってふさわしいものだった
設問10	この授業は自分にとって満足出来るものであった
設問11	この授業によって知識を深めることができた
設問12	この授業の目的・ねらいを十分理解できた
設問13	この授業の内容は興味のあるものだった
設問14	このクラスの雰囲気は良好であった
設問15	自分はこの授業に意欲的に取り組んだ
実技履修者のみ回答	
設問16	この授業は健康や体力の向上に役立った
設問17	この授業によって運動技術が向上した
設問18	運動量は適切であった
講義・演習履修者のみ回答	
設問19	配布資料やプレゼンテーションが適切であった
自由記述	
設問20	この授業を履修した理由・動機について記入してください
設問21	授業内容について記入してください（良かった事）
設問22	授業内容について記入してください（改善を要求することなど）
設問23	担当教員について記入してください（良かった事）
設問24	担当教員について記入してください（改善を要求することなど）
設問25	施設および機器・用具等について記入してください（良かった事）
設問26	施設および機器・用具等について記入してください（改善を要求することなど）
設問27	体育科目全般に関する意見および提案について記入してください

表Ⅲ-1-8. 授業評価アンケート質問項目（シーズンスポーツ）

選択肢からの回答	
設問 1	自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した
設問 2	教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した
設問 3	教員の指導・教授方法は適切であった
設問 4	教員はこの授業についての十分な知識を持っていた
設問 5	教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した
設問 6	教員の話し方は聞き取りやすかった
設問 7	この授業は塾生にとってふさわしいものだった
設問 8	この授業は自分にとって満足出来るものであった
設問 9	この授業によって知識を深めることができた
設問10	この授業の目的・ねらいを十分理解できた
設問11	この授業の内容は興味のあるものだった
設問12	このクラスの雰囲気は良好であった
設問13	自分はこの授業に意欲的に取り組んだ
設問14	この授業は健康や体力の向上に役立った
設問15	この授業によって運動技術が向上した
設問16	運動量は適切であった
自由記述	
設問17	この授業を履修した理由・動機について記入してください
設問18	授業内容について記入してください（良かった事）
設問19	授業内容について記入してください（改善を要求することなど）
設問20	担当教員について記入してください（良かった事）
設問21	担当教員について記入してください（改善を要求することなど）
設問22	施設および機器・用具等について記入してください（良かった事）
設問23	施設および機器・用具等について記入してください（改善を要求することなど）
設問24	体育科目全般に関する意見および提案について記入してください

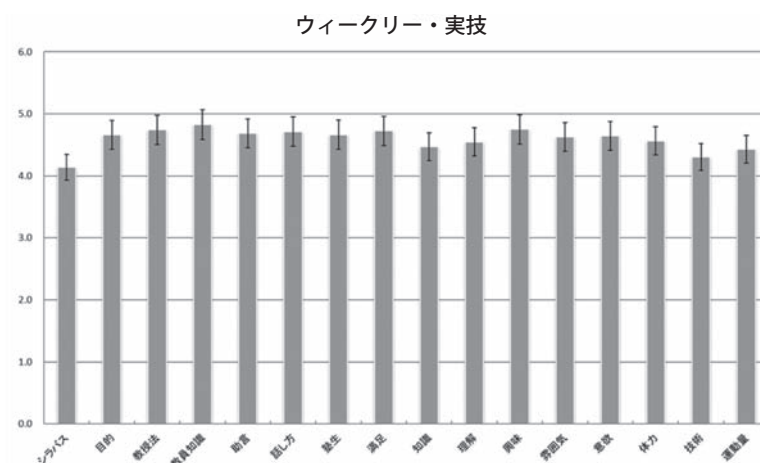
1) 体育実技ウィークリー種目の授業評価

体育実技ウィークリー種目における質問項目別5段階評価（平均値±標準偏差）を図Ⅲ-1-1（春学期）、図Ⅲ-1-2（秋学期）に示した。結果をみるとほぼ例年と同様の傾向であり、以下のようにまとめられる。

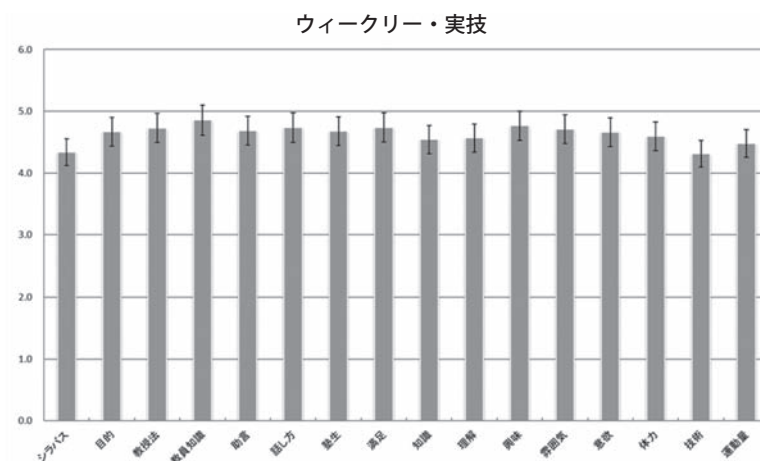
春・秋の学期間に差はほとんどなく、同じ傾向が得られている。全般に4点以上の肯定的評価がほとんどであった。平均値で最も高い評価となったものは、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」（春：4.8±0.4、秋：4.9±0.4）であり、「教員の指導・教授方法は適切であった」、「教員の話し方は聞き取りやすかった」等教員に対する評価に加え、「満足度」も高い値を示した。

一方、最も平均点が低いものは「自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した」であった（春：4.1±1.0、秋：4.3±0.8）。このことは、曜日や時限による制約から単に時間割を埋めるために履修していたり、第1希望の種目に抽選漏れした学生が他の種目を履修していたりすることが考えられる。

表Ⅲ-1-9、10には春学期・秋学期の種目別の5段階評価を示した。その結果「運動技術の向上」、などが低い値を示し、個人種目7種目などが3点台であった。種目の違いにより技術向上の難易度は異なるため、そのことを教員が理解させながら履修者に伝える必要があると考えられる。



図Ⅲ-1-1. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期実技ウィークリー全体平均）



図Ⅲ-1-2. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期ウィークリー全体平均）

表Ⅲ-1-9. 種目別の5段階評価集計一覧（春学期ウィークリー）

種目名	人数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
アーチェリー	11	平均	4.2	4.5	4.7	4.6	5.0	4.7	4.3	4.8	4.0	4.2	4.9	4.4	4.6	4.4	4.3	4.5
		標準偏差	0.9	0.5	0.5	0.5	0.0	0.5	0.8	0.4	0.8	0.8	0.3	0.8	0.5	0.7	0.8	0.7
合気道	21	平均	4.5	5.0	4.9	5.0	4.8	5.0	5.0	4.8	4.8	4.9	4.9	4.8	4.7	4.8	4.4	4.6
		標準偏差	0.7	0.2	0.4	0.0	0.5	0.0	0.0	0.4	0.4	0.4	0.3	0.4	0.6	0.5	0.7	0.5
インドアスポーツ	0	平均	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウォーキングエクササイズ	0	平均	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
エアロビクス	31	平均	4.3	4.7	4.7	4.8	4.6	4.8	4.6	4.6	4.3	4.5	4.5	4.6	4.6	4.5	3.8	4.4
		標準偏差	0.7	0.5	0.4	0.4	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.5	0.5	0.9	0.9
空手	23	平均	4.7	5.0	4.9	5.0	5.0	5.0	5.0	4.9	5.0	4.9	4.9	4.8	5.0	4.9	4.9	4.8
		標準偏差	0.7	0.2	0.3	0.0	0.0	0.0	0.2	0.3	0.2	0.3	0.6	0.0	0.3	0.3	0.5	0.5
気功	40	平均	4.1	4.5	4.7	4.8	4.5	3.7	4.5	4.6	4.4	4.4	4.5	4.5	4.3	4.1	3.2	3.6
		標準偏差	0.9	0.6	0.5	0.4	0.6	0.9	0.6	0.5	0.8	0.7	0.6	0.7	0.7	1.0	1.2	1.1
弓術	4	平均	3.5	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	5.0	5.0	4.3	5.0	4.3	4.3	3.5	4.3	4.3
		標準偏差	1.0	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.0	0.0	0.5	0.0	0.5	0.5	1.0	0.5	0.5
剣道	6	平均	3.7	4.8	4.8	4.3	4.7	4.8	4.8	4.7	4.3	4.3	4.7	4.3	4.2	4.2	3.8	4.3
		標準偏差	0.8	0.4	0.4	1.2	0.5	0.4	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.8	0.4	0.4	0.8	0.5
ゴルフ	25	平均	4.2	4.6	4.4	4.9	4.4	4.6	4.7	4.6	4.6	4.6	4.8	4.1	4.7	4.1	4.2	4.2
		標準偏差	0.9	0.6	0.8	0.3	0.8	0.5	0.5	0.7	0.6	0.6	0.5	0.7	0.5	0.8	0.9	0.6
サッカー	34	平均	4.0	4.7	4.8	5.0	4.9	4.9	4.7	4.7	4.3	4.6	4.9	4.8	4.7	4.8	4.3	4.6
		標準偏差	1.2	0.5	0.4	0.2	0.4	0.3	0.4	0.5	0.9	0.5	0.3	0.5	0.4	0.4	0.9	0.6
自動車	14	平均	4.2	4.6	4.4	4.9	4.8	4.4	4.8	4.6	4.9	4.8	4.6	4.6	4.6	3.9	4.2	4.1
		標準偏差	1.3	0.5	0.5	0.3	0.4	0.9	0.4	0.6	0.3	0.4	0.5	0.5	0.6	1.1	1.1	0.9
柔道	6	平均	4.3	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.7	4.7	4.8	5.0	4.8	5.0	5.0	5.0
		標準偏差	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.5	0.4	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0
水泳	29	平均	4.2	4.9	4.8	4.9	4.9	4.6	4.8	4.9	4.8	4.8	4.9	4.7	4.7	4.9	4.5	4.4
		標準偏差	0.7	0.3	0.4	0.3	0.4	0.8	0.5	0.4	0.4	0.4	0.3	0.5	0.5	0.4	0.9	0.5
ソフトテニス	8	平均	4.1	4.4	4.9	5.0	4.8	4.9	4.6	4.9	4.8	4.8	4.9	5.0	4.9	4.9	4.9	4.8
		標準偏差	0.8	0.7	0.4	0.0	0.5	0.4	0.7	0.4	0.7	0.5	0.4	0.0	0.4	0.4	0.4	0.5
ソフトボール	13	平均	3.8	4.5	4.7	4.6	4.7	4.8	4.7	4.8	4.2	4.4	4.8	4.9	4.7	4.4	4.3	4.5
		標準偏差	1.1	0.7	0.5	0.7	0.5	0.4	0.6	0.4	0.8	0.5	0.6	0.3	0.5	0.7	0.8	0.7
太極拳	5	平均	4.4	4.0	4.2	4.4	4.6	4.6	4.2	4.2	4.4	4.2	4.0	4.8	4.2	4.0	3.8	4.0
		標準偏差	0.5	0.7	0.4	0.9	0.5	0.5	0.8	0.4	0.5	0.8	0.7	0.4	0.4	0.7	0.4	0.8
卓球	33	平均	4.0	4.5	4.6	4.8	4.7	4.8	4.4	4.8	4.2	4.4	4.7	4.8	4.8	4.5	4.5	4.3
		標準偏差	0.8	0.5	0.5	0.4	0.5	0.4	0.7	0.4	0.9	0.6	0.5	0.5	0.4	0.8	0.6	0.8
テニス	79	平均	4.1	4.7	4.8	4.8	4.7	4.8	4.8	4.7	4.5	4.6	4.7	4.8	4.6	4.6	4.3	4.4
		標準偏差	1.1	0.5	0.4	0.5	0.7	0.4	0.5	0.5	0.7	0.7	0.5	0.5	0.5	0.7	0.8	0.7
軟式野球	2	平均	3.5	4.0	5.0	5.0	4.5	4.0	4.0	5.0	4.5	4.0	4.5	4.0	5.0	3.5	4.5	3.5
		標準偏差	0.7	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	0.7	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.7	0.7	0.7
ニュースポーツ	10	平均	4.4	4.8	4.8	4.8	4.6	4.9	4.7	4.7	4.8	4.8	4.9	4.9	4.6	4.0	3.8	4.6
		標準偏差	0.7	0.4	0.4	0.4	0.5	0.3	0.7	0.7	0.4	0.4	0.3	0.3	0.7	1.1	1.2	0.5
バスケットボール	49	平均	3.8	4.7	4.7	4.7	4.7	4.6	4.6	4.7	4.3	4.5	4.7	4.7	4.4	4.6	4.4	4.5
		標準偏差	1.1	0.5	0.6	0.5	0.6	0.5	0.5	0.6	0.8	0.7	0.5	0.5	0.8	0.5	0.8	0.6
バックカントリースキル (カヤック)	2	平均	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
		標準偏差	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7
バックカントリースキル (バックパッキング)	2	平均	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
		標準偏差	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7
バドミントン	47	平均	4.2	4.6	4.7	4.9	4.6	4.8	4.7	4.8	4.4	4.4	4.9	4.6	4.9	4.8	4.6	4.4
		標準偏差	0.8	0.6	0.5	0.3	0.6	0.5	0.6	0.5	0.7	0.7	0.4	0.7	0.4	0.4	0.7	0.8
バレエエクササイズ	13	平均	4.6	4.8	4.9	4.8	4.8	5.0	4.9	4.5	4.5	4.5	4.9	4.7	4.6	4.7	4.1	4.5
		標準偏差	0.5	0.4	0.3	0.4	0.4	0.0	0.3	0.5	0.5	0.5	0.3	0.5	0.5	0.5	0.8	0.5
バレーボール	51	平均	4.1	4.6	4.6	4.8	4.7	4.8	4.6	4.7	4.4	4.4	4.7	4.7	4.7	4.6	4.5	4.5
		標準偏差	1.1	0.7	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5	0.8	0.8	0.6	0.5	0.5	0.6	0.6	0.7
ハンドボール	13	平均	4.5	4.6	5.0	4.8	4.7	4.6	4.3	4.8	4.5	4.3	5.0	4.8	5.0	5.0	4.8	4.3
		標準偏差	0.7	0.5	0.0	0.6	0.5	0.5	0.8	0.4	0.8	0.9	0.0	0.4	0.0	0.0	0.4	0.6
フィットネストレーニング	45	平均	3.6	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.8	4.4	4.4	4.7	4.8	4.4	4.7	4.8	4.1	4.4
		標準偏差	1.5	0.4	0.4	0.3	0.4	0.4	0.5	0.4	0.6	0.5	0.5	0.6	0.4	0.4	0.9	0.5
フェンシング	2	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.7
フットサル	60	平均	4.3	4.7	4.8	4.8	4.7	4.8	4.7	4.7	4.4	4.5	4.7	4.6	4.6	4.6	4.6	4.7
		標準偏差	1.0	0.6	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.7	0.7	0.7	0.5	0.7	0.7	0.8	0.6	0.5
フライングディスク	5	平均	4.4	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.4	4.8	4.6	4.6	4.8	4.8	4.8	4.4	4.2	4.2
		標準偏差	0.9	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.9	0.4	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.9	0.4	0.8
ボクシング	4	平均	4.0	4.5	4.8	5.0	4.3	4.8	4.8	4.8	4.8	5.0	4.8	4.5	4.5	4.5	4.8	4.5
		標準偏差	0.8	0.6	0.5	0.0	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.0	0.5	0.6	1.0	1.0	0.5	0.6
ボディコンディショニング (ピラティス)	15	平均	4.4	4.3	4.5	4.9	4.3	4.7	4.4	4.5	4.5	4.5	4.5	4.7	4.4	4.5	4.1	4.5
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.3	0.6	0.5	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5	0.7	0.5
ボディコンディショニング (エアロビクス&ヨガ)	16	平均	4.6	4.9	5.0	4.7	4.8	5.0	4.8	4.8	4.4	4.6	4.9	4.3	4.9	4.5	4.1	4.6
		標準偏差	0.6	0.3	0.0	0.5	0.4	0.0	0.4	0.4	0.7	0.5	0.3	0.9	0.3	0.6	1.0	0.6
ボディコンディショニング (ヨガ&ピラティス)	6	平均	4.7	5.0	5.0	5.0	4.8	4.8	4.8	4.8	4.7	4.5	5.0	4.0	4.3	4.5	4.0	4.3
	</																	

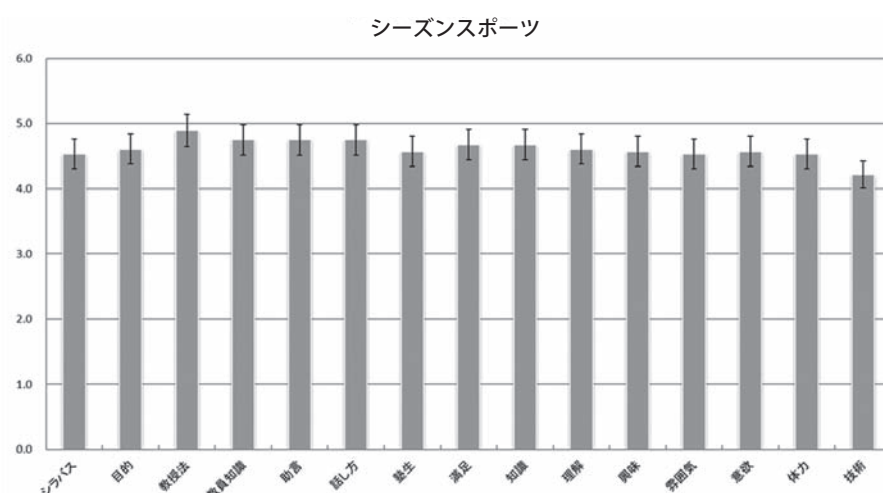
表Ⅲ-1-10. 種目別の5段階評価集計一覧（秋学期ウィークリー）

種目名	人数		シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
アーチェリー	6	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5	2.5	4.7
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	1.6
合気道	16	平均	4.6	4.8	4.9	5.0	4.8	4.9	4.9	5.0	4.6	4.6	4.9	4.9	4.9	4.7	4.2	4.5
		標準偏差	0.8	0.4	0.3	0.0	0.4	0.3	0.0	0.0	0.6	0.6	0.3	0.3	0.3	0.5	0.8	0.6
インドアスポーツ	2	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5	5.0	5.0
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0
ウォーキングエクササイズ	1	平均	4.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	3.0	4.0
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
エアロビクス	15	平均	4.3	4.7	4.5	4.9	4.5	4.7	4.5	4.5	4.2	4.3	4.5	4.5	4.4	4.6	4.0	4.3
		標準偏差	0.5	0.5	0.7	0.4	0.5	0.5	0.5	0.7	0.7	0.6	0.5	0.6	0.6	0.5	0.8	0.8
空手	9	平均	4.2	4.8	4.9	4.9	4.9	5.0	5.0	5.0	4.7	4.7	4.9	5.0	4.9	4.8	4.8	5.0
		標準偏差	0.8	0.4	0.3	0.3	0.3	0.0	0.0	0.0	0.5	0.5	0.3	0.0	0.3	0.4	0.4	0.0
気功	8	平均	4.3	4.5	4.6	5.0	4.5	3.4	4.5	4.9	4.5	4.5	4.6	4.6	4.4	4.8	3.6	3.8
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.0	0.5	1.3	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	1.3	
弓術	4	平均	4.5	4.5	4.8	4.8	4.8	4.5	4.5	4.8	4.8	4.5	5.0	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
		標準偏差	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6	0.5	0.5	0.6	0.0	1.0	0.6	0.6	0.6	0.6
剣道	13	平均	4.2	4.7	4.8	4.8	5.0	5.0	4.5	4.5	4.6	4.3	4.6	4.8	4.2	4.0	4.1	4.1
		標準偏差	0.4	0.5	0.4	0.4	0.0	0.0	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.4	0.7	0.5	0.6
ゴルフ	12	平均	4.6	4.8	4.8	4.9	4.4	4.6	4.7	4.6	4.7	4.8	4.8	4.5	4.8	4.6	4.4	4.5
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.3	0.5	0.9	0.7	0.7	0.5	0.5	0.4	0.8	0.4	0.7	0.8	0.8
サッカー	5	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.8	5.0	4.8
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0
自動車	9	平均	4.7	4.9	4.9	4.9	4.7	4.6	4.8	4.8	4.9	4.8	5.0	4.7	4.7	4.0	4.0	4.1
		標準偏差	0.5	0.3	0.3	0.3	0.5	0.7	0.4	0.4	0.3	0.4	0.0	0.5	0.5	0.7	1.3	0.8
柔道	4	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ジョギング	1	平均	5.0	5.0	4.0	5.0	3.0	5.0	4.0	5.0	4.0	5.0	5.0	4.0	5.0	5.0	5.0	4.0
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
水泳	8	平均	4.1	4.5	4.6	4.9	4.9	4.8	4.9	4.6	4.9	4.5	4.8	4.5	4.6	4.8	4.5	4.4
		標準偏差	1.5	0.8	0.5	0.4	0.4	0.5	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.8
水球	1	平均	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ソフトテニス	0	平均	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ソフトボール	10	平均	4.1	4.3	4.6	4.7	4.6	4.8	4.8	4.8	4.4	4.4	4.8	4.6	4.8	4.7	4.6	4.7
		標準偏差	1.0	0.7	0.7	0.5	1.0	0.4	0.6	0.6	0.8	1.0	0.6	0.7	0.6	0.7	0.7	0.7
太極拳	4	平均	4.5	4.5	4.3	4.5	4.3	4.8	4.5	4.5	4.8	4.8	4.5	4.8	4.0	4.3	3.8	4.0
		標準偏差	1.0	0.6	0.5	1.0	0.5	0.5	0.6	0.6	0.5	0.5	0.6	0.5	0.8	0.5	1.0	0.8
卓球	5	平均	3.8	4.4	4.2	4.6	4.8	4.6	4.4	4.4	4.6	4.2	4.6	4.4	4.4	4.2	4.2	4.2
		標準偏差	0.4	0.9	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	0.9	0.5	0.4	0.5	0.5	0.9	0.8	0.8	0.4
テニス	19	平均	4.3	4.8	4.7	4.9	4.5	4.8	4.6	4.7	4.5	4.5	4.7	4.7	4.7	4.7	4.6	4.6
		標準偏差	1.0	0.5	0.6	0.5	0.7	0.5	0.7	0.7	0.6	0.6	0.7	0.6	0.7	0.7	0.7	0.7
軟式野球	0	平均	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ニュースポーツ	6	平均	4.3	4.5	4.5	4.3	4.5	4.7	4.3	4.7	4.3	4.2	4.7	4.3	4.3	3.8	3.5	3.8
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	1.6	0.5	0.5	0.8	0.5	0.5	0.4	0.5	0.8	0.5	0.8	0.5	0.4
バスケットボール	10	平均	4.3	4.8	4.7	4.7	4.6	4.8	4.6	4.9	3.7	4.7	4.7	4.7	4.8	4.6	4.0	4.4
		標準偏差	0.7	0.4	0.5	0.5	0.7	0.4	0.7	0.3	1.2	0.5	0.5	0.7	0.4	0.7	1.1	0.7
バドミントン	40	平均	4.2	4.6	4.8	4.9	4.7	4.7	4.7	4.8	4.6	4.6	4.7	4.8	4.7	4.8	4.7	4.7
		標準偏差	0.7	0.6	0.4	0.4	0.5	0.6	0.5	0.4	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6
バレエエクササイズ	0	平均	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
バレーボール	17	平均	4.1	4.4	4.6	4.8	4.6	4.8	4.4	4.5	4.1	4.2	4.6	4.7	4.6	4.6	4.1	4.6
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.4	0.6	0.6	0.7	0.8	0.5	0.8	0.5	0.6	1.1	0.5
フィットネストレーニング	9	平均	4.3	4.9	4.9	4.9	5.0	4.7	4.7	4.8	4.7	4.9	5.0	4.8	4.9	4.9	4.8	4.1
		標準偏差	1.4	0.3	0.3	0.3	0.0	1.0	0.7	0.4	0.7	0.3	0.0	0.4	0.3	0.3	0.4	1.2
フェンシング	0	平均	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
フットサル	14	平均	4.0	4.6	4.9	5.0	4.8	5.0	4.9	4.9	4.6	4.7	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8
		標準偏差	1.2	0.6	0.4	0.0	0.6	0.0	0.3	0.3	0.6	0.5	0.3	0.4	0.3	0.3	0.4	0.6
フライングディスク	3	平均	4.0	4.7	5.0	5.0	4.7	4.7	4.7	4.7	5.0	4.7	4.7	4.7	4.3	4.0	4.0	4.3
		標準偏差	1.0	0.6	0.0	0.0	0.6	0.6	0.6	0.6	0.0	0.6	0.6	0.6	0.6	1.0	1.0	0.6
ボクシング	3	平均	4.7	5.0	4.3	5.0	5.0	3.7	4.3	4.0	4.7	4.7	5.0	4.3	5.0	3.7	4.7	4.0
		標準偏差	0.6	0.0	0.6	0.0	0.0	0.6	0.6	0.0	0.6	0.6	0.0	0.6	0.0	1.2	0.6	1.0
ボディコンディショニング (ピラティス)	5	平均	4.8	4.6	4.6	4.8	4.4	5.0	4.8	4.6	4.4	4.6	4.2	4.8	4.4	4.8	3.4	4.0
		標準偏差	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.0	0.4	0.9	0.9	0.5	0.8	0.4	0.5	0.4	1.1	0.7
ボディコンディショニング (エアロビクス&ヨガ)	1	平均	5.0	4.0	5.0	4.0	4.0	5.0	4.0	5.0	4.0	4.0	5.0	4.0	4.0	4.0	3.0	5.0
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ボディコンディショニング (ヨガ&ピラティス)	0	平均	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ボディメイクエクササイズ	0	平均	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
野球	12	平均	4.6	4.7	4.8	4.9	4.7	4.8	4.8	4.8	4.5	4.7	4.9	4.7	4.3	4.5	4.5	4.6
		標準偏差	0.7	0.7	0.6	0.3	0.7	0.5	0.5	0.6	0.7	0.5	0.3	0.7	1.2	0.7	0.7	0.7
実技全体	272	平均	4.3	4.7	4.7</													

2) シーズンスポーツ種目の授業評価

シーズンスポーツ種目における5段階評価(平均値±標準偏差)を図Ⅲ-1-3に、また種目別の5段階評価を表Ⅲ-1-11に示した。すべての項目とも平均値で4点をこえる肯定的評価が得られている。特に「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」(4.9

±0.3)「教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した」(4.8±0.4)、「この授業は塾生にとってふさわしいものだった」(4.8±0.4)などが高い得点を示した。一方、「運動量は適切であった」は他の項目と比較して低い値(4.2±1.0)を示した。



図Ⅲ-1-3. 授業に関する質問項目別の5段階評価 (シーズンスポーツ全体平均)

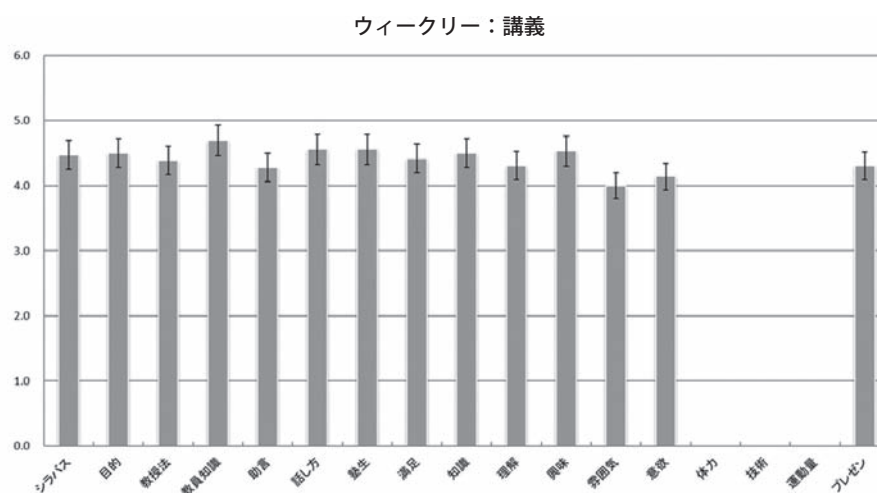
表Ⅲ-1-11. 種目別の5段階評価集計一覧 (シーズンスポーツ)

種目名	人数	シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量	
アウトドアレクリエーション	0	平均 標準偏差	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	
スキー	13	平均 標準偏差	4.2 0.8	4.2 1.1	4.4 0.7	4.9 0.3	4.7 0.5	4.6 0.9	4.6 0.5	4.5 0.8	4.7 0.5	4.5 0.8	4.4 1.1	4.4 0.8	4.5 0.8	4.5 0.7	4.0 1.2	
スケート	0	平均 標準偏差	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	
セーリング	1	平均 標準偏差	4.0 —	5.0 —	5.0 —	5.0 —	5.0 —	5.0 —	5.0 —	4.0 —	5.0 —	5.0 —	5.0 —	4.0 —	4.0 —	4.0 —	4.0 —	
Natuer & Trail	0	平均 標準偏差	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —	
馬術	5	平均 標準偏差	4.8 0.4	4.8 0.4	4.8 0.4	4.8 0.4	4.8 0.4	5.0 0.0	5.0 0.0	5.0 0.0	4.8 0.4	5.0 0.0	5.0 0.0	4.8 0.4	4.6 0.5	4.4 0.5	4.4 0.9	
ビーチバレー	7	平均 標準偏差	4.6 0.5	4.9 0.4	4.9 0.4	4.9 0.4	4.9 0.4	4.9 0.4	4.9 0.4	4.7 0.5	4.6 0.5	4.7 0.5	4.9 0.4	4.7 0.5	4.9 0.4	4.7 0.5	4.9 0.4	
マリンスポーツアクティビティ	2	平均 標準偏差	5.0 0.0	5.0 0.0	4.5 0.7	5.0 0.0	4.5 0.7	4.5 0.7	4.5 0.7	3.5 0.7	4.5 0.7	4.5 1.4	4.0 0.0	4.5 0.7	4.0 1.4	4.5 0.7	3.0 1.4	
シーズン全体	28	平均 標準偏差	4.4 0.7	4.5 0.9	4.6 0.6	4.9 0.3	4.8 0.4	4.8 0.6	4.8 0.4	4.6 0.7	4.7 0.5	4.7 0.5	4.6 0.7	4.6 0.8	4.5 0.6	4.6 0.7	4.5 0.6	4.2 1.0

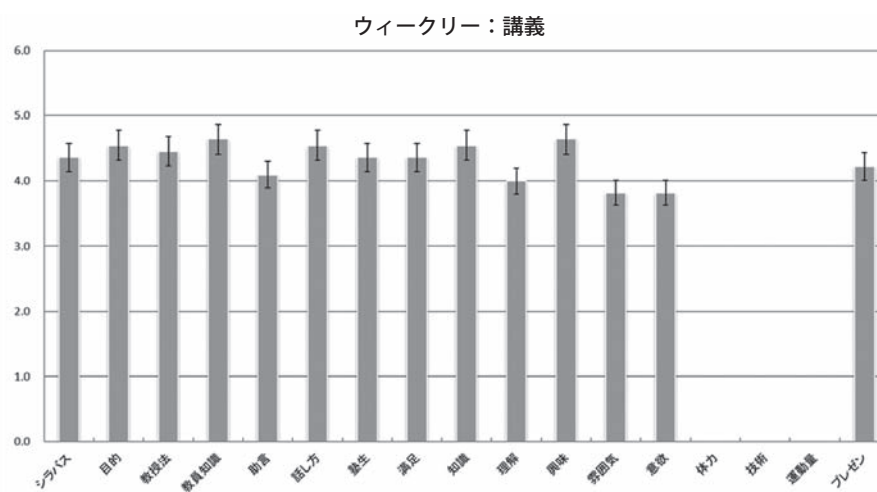
3) 講義・演習科目の授業評価

講義・演習科目の授業評価についての結果を図Ⅲ-1-4（春学期）、図Ⅲ-1-5（秋学期）に示した。ほとんどの項目とも平均値で4点をこえる肯定的評価が得られている。特に昨

年度同様、「教員はこの授業についての十分な知識を持っている」は高い値を示した。（春：4.7±0.5、秋：4.9±0.3）



図Ⅲ-1-4. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期全体平均）



図Ⅲ-1-5. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期講義全体平均）

3. 通信教育対象科目

1) 体育理論

レポートおよび試験問題の出題・採点を、加藤大仁君、山内賢君、須田芳正君で担当した。

2) 体育実技スクーリング

2017年8月7日から8月12日の連続6日間、6種目を日吉キャンパスにて実施した。

6種目のうち1種目は「スポーツクラス」という1単位の授業であり、5種目は「スポーツセミナー」という2単位の授業であった。スポーツクラスは実技と講義から構成されるのに対し、スポーツセミナーは講義と演習から構成される。これらの種目・担当者・定員・履修者数等を表Ⅲ-1-12に示す。

表Ⅲ-1-12. 2017年度通信教育部体育実技スクーリング開講種目および担当者一覧

	種 目 名	担当者	定 員	履修者数	充足率
スポーツクラス	ゴルフ	勝又 正浩	20	21	105%
スポーツセミナー	卓球	木林 弥生	25	26	104%
	バスケットボール	永田 直也	25	23	92%
	フィットネストレーニング	山内 賢	25	26	104%
	ピラティス（健康身体作り）	板垣 悦子	20	20	100%
	テニス	村松 憲	20	20	100%
合 計			135	136	101%

4. 塾内における授業担当

日吉、三田及び芝共立キャンパスにおいて開講される体育研究所設置の体育科目及び通信教育部のテキスト科目・スクーリング科目

に加え、各学部の設置科目の開講についても協力している。2017年度の他学部設置科目及び担当者を表Ⅲ-1-13に示す。

表Ⅲ-1-13. 塾内における授業担当及び協力

授 業 科 目 名	担 当 者	開講学部など	曜日時限など
薬学生のための体験学習プログラム	板垣 悦子	薬学部	春秋学期水曜 6 時限
体育 1	野口 和行	総合政策学部 環境情報学部	春学期月曜 3 時限
体育 2～5 (野外スポーツ)	野口 和行	総合政策学部 環境情報学部	春学期月曜 3 時限 秋学期月曜 2・3 時限
体育 1	村山 光義	総合政策学部 環境情報学部	春学期金曜 2 時限
体育 2～5 (フライングディスク、レクリエーションスポーツ)	村山 光義	総合政策学部 環境情報学部	春秋学期金曜 3 時限 (フライングディスク)・秋学期金曜 2 時限 (レクリエーションスポーツ)
人体の科学	佐々木玲子 村山 光義	理工学部	秋学期水曜 5 時限

Ⅲ－２ スポーツイベントの開催

1. 塾長杯・塾内競技大会

1) 塾長杯フットサル大会

1. 開催日：2017年6月3日（土）
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：9:00～16:30
4. 参加チーム数：24チーム
5. 参加者数：約260名
（登録選手数195名、教職員約15名、観客約50名）
6. 試合数：43試合（最高6試合、最低3試合）
7. 協 力：フットサルサークル（エルレイナ）
放送研究会（K-Sound）
8. 参加チーム説明会
2017年5月25日（木）16:30～17:00
スポーツ棟（体育研究所）2F会議室
9. 応募チーム数：23チーム
10. 表彰チーム
優勝：ぴろぴろキッカーズ
2位：F.C. ばにら
3位：Marco FC A
ASHIZARU
11. コメント

本大会は、応募チーム数が募集チーム数に達しなかったため、抽選会を行わず、説明会に出席した23チームと教職員チームを合わせた計24チームにおいて大会が行われた。

日吉記念館に3コート作り、予選リーグは、12分間×1本、決勝トーナメントは15分間の一発勝負で優勝の栄光を賭けた激しい試合がいくつも繰り広げられた。今年度は、フットサルやサッカーを中心に活動しているサークルからの出場チームが多く、例年以上にレベルの高い大会となったように感じた。



2) 塾長杯バレーボール大会

1. 開催日：2017年7月8日（土）
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：9:00～17:00
4. 参加チーム数：36チーム（チャンピオンリーグ12、エンジョイリーグ24）
5. 参加者数：約331名
（登録選手数266名、教職員約15名、観客約50名）
6. 試合数：46試合（最高5試合、最低2試合）
7. 協 力：大会実行学生スタッフ
放送研究会（K-Sound）
8. 参加チーム説明会
2017年6月29日（木）16:30～17:00
スポーツ棟（体育研究所）2F会議室
9. 応募チーム数：36チーム
10. 表彰チーム
チャンピオンリーグ
優勝：隈本、ミドルやめるってよ
2位：ジャッキーズ
3位：メンチであれ be ambitions
returns
安藤が無双する説 is 濃厚
エンジョイリーグ
優勝：Absurdity
2位：FINESTRA
3位：ムーチョゲースト
TEAM 教職員
11. コメント

本大会は、チャンピオンリーグ12チーム、エンジョイリーグ24チームが参加

した。チャンピオンリーグは4リーグ各チーム2試合ずつの予選を行い、各リーグ1位が決勝トーナメントに進出し、戦った。エンジョイリーグは8リーグ各2試合ずつの予選を行い、各リーグ1位が決勝トーナメントを戦った。

チャンピオンリーグ、エンジョイリーグともに、白熱した試合が展開され、教職員チームもエンジョイリーグで3位という好成績を残した。



3) 塾長杯バスケットボール大会

1. 開催日：2017年10月12日
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：9:00～17:00
4. 参加チーム数：20チーム（アルティメットリーグ8、エンジョイリーグ12）
5. 参加者数：約197名
（登録選手数137名、教職員約10名、観客約50名）
6. 試合数：48試合（最高7試合、最低3試合）
7. 協 力：大会実行学生スタッフ
放送研究会（K-Sound）
8. 参加チーム抽選会
2017年10月12日（木）16:30～17:00
スポーツ棟（体育研究所）2F会議室
9. 応募チーム数
アルティメットリーグ：8チーム
エンジョイリーグ：16チーム
10. 表彰チーム
アルティメットリーグ
優勝：K-フレンズ
2位：kagers

3位：ゴブリン突撃部隊

owls

エンジョイリーグ

優勝：フェアリーズ

2位：シャバーニ

3位：薬学部バスケットボールチーム

K.B.B

11. コメント

本大会は、アルティメットリーグ8チーム、エンジョイリーグは抽選によって選ばれた12チーム、の2リーグに分かれて大会が行われた。両リーグともに、チームのカラーを出し切って、迫力ある試合が展開された。

運営には、大会学生スタッフが準備から片付け、受付やゲーム進行を行った。また今回はアルティメットリーグに出場しているチームに審判を割り当てる形で大会を進めた。大会は、毎年協力いただいている放送研究会による試合実況などにより、より一層盛り上がった。本大会は、参加選手をはじめ、大会実行学生スタッフ、教職員等、大会に関わるすべての人が一体となった大会であった。

4) 新春塾内卓球大会

1. 開催日：2018年1月13日（土）
2. 会 場：スポーツ棟（体育研究所）
地下1階卓球場
3. 開催時間：10:00～15:00
4. 参加者数：42名
（塾生、教職員及び卒業生約42名）
（シングルス23名、ダブルス11ペア）
5. ゲーム形式
予選：11点先取2セットマッチ
決勝：11点先取3セットマッチ
6. 表彰チーム
ダブルス（中・上級の部）
優勝：守友康一（環境情報OB）
木林弥生（非常勤講師）

準優勝：六田遼哉（商1年）

塚本健太（商2年）

ダブルス（温泉の部）

優勝：太田匡人（商3年）

植村遼平（文3年）

準優勝：草柳太平（文3年）

中山栞里（経済3年）

シングルス（上級の部）

優勝：團 皆人（理工4年）

準優勝：六田遼哉（商1年）

シングルス（中級の部）

優勝：青木悠真（商2年）

準優勝：中山栞里（経済3年）

シングルス（温泉の部）

優勝：村上正臣（法4年）

準優勝：尾池 悠（商4年）

7. コメント

卓球大会は毎年お正月明けに開催され、他のスポーツ大会とは違い、卒業生も参加いただいている、極めてアットホームな雰囲気の中で行われる大会である。昨年同様、審判も参加者で割り当てし、参加者全員で創る大会として運営を行った。当日は急遽欠席となった参加者が何名か出てしまったが、その分を教員が出場するなど、例年以上に参加者同士の交流が深められた大会となった。



2. 公開講座

1) ヨガ&ピラティス

1. 日程：

①2017年6月15日（木）・22日（木）・29日（木）、7月5日（水）・12日（水）・19日（水）

※木曜日3回がピラティス、水曜日3回がヨガの全6回

②2017年10月16日（月）・23日（月）・30日（月）、11月1日（水）・8日（水）・15日（水）

※月曜日3回がピラティス、水曜日3回がヨガの全6回

2. 会場：協生館エクササイズスタジオ

3. 開催時間：18:30～19:30

4. 講師

ピラティス：

板垣悦子（体育研究所准教授）

ヨガ：

杉本亮子（体育研究所非常勤講師）

5. 参加者数：

①25名

②12名

6. 受講料：3,500円

7. コメント：

毎年好評いただいているヨガとピラティスの講座を、今年度は各3回ずつ計6回を一つのプログラムとして開講した。春学期と秋学期で開講曜日を変えるなど、塾内、塾外問わず、より多くの方にスポーツの機会を提供できるように実施した。今後も、すべての人にスポーツの素晴らしさを感じてもらえるよう、各種公開講座を開催できるよう検討していく。

3. 所内施設の開放

1) 協生館トレーニングルーム開放

1. 期間：

【春学期】

2017年5月15日（月）～7月14日（金）

【秋学期】

2017年10月2日（月）

～2018年1月19日（金）

2. 曜日時間：

月・水・金（16:30～18:00）

3. 担当者

【春学期】

月：小畑彩絵 君（理工学研究科1年）

水：福士徳文・稲見崇孝（助教）

金：和田諒子 君（文学部1年）

【秋学期】

月：小畑彩絵 君（理工学研究科1年）

水：福士徳文・稲見崇孝（助教）

金：和田諒子 君（文学部1年）

4. 利用者数：452名

（春学期216名、秋学期236名）

5. コメント：

今年度は昨年より日数を減らして開放したことに伴い、利用者も減少した。一方、留学生の利用者は増えてきている（秋学期利用者のうち43名が留学生）ことから、トレーニングルーム内の掲示物を英語化するなど、トレーニングの充実や安全管理にも配慮した開放を目指して随時準備を進めていく。

2) 多目的コートの貸し出し

1. 曜日時間：平日 授業時間以外

2. 利用状況：11団体

3. 日数：14日 / 27日稼働

※記念館の建て替えに伴い、秋学期は授業での使用時間が増えたため、貸し出しは春学期のみ行った。

Ⅲ－３ 他機関との連携

1. 公開講座

I. 慶應義塾大学・読売新聞社 横浜市民講座「スポーツの見方・楽しみ方」

1. タイトル：「スポーツインテグレーション スポーツをすべての人に」
2. 日 程：2017年6月17日（土） 午前の部（実技）・午後の部（講演）
3. 会 場：日吉キャンパス 午前の部：記念館 午後の部：独立館 DB202
4. 開催時間：午前の部 10:00～12:00、午後の部 13:00～15:00
5. 対 象 者：誰でも参加可
6. 講 師：

【午前の部】

- | | |
|---------------------------------------|----------------------|
| 実技1：「ポールウォーキングでスマートなウォーキングはいかがでしょうか？」 | 山内 賢（慶應義塾大学体育研究所准教授） |
| 実技2：「健康ストレッチ」 | 稲見崇孝（慶應義塾大学体育研究所助教） |
| 実技3：「ブラインドサッカー」 | buen cambio yokohama |
| 実技4：「ボッチャ」 | 横浜ボッチャ協会 |

【午後の部】

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 講 演：「人の可能性について」 | 室伏重信氏（中京大学名誉教授） |
|-----------------|-----------------|

7. 受 講 料：無料

2. 一貫校連携

I. 幼稚舎館山遠泳合宿（水泳指導教員）

1. 日 程：2017年7月24日（月）
2. 会 場：千葉県館山市見物海岸
3. 対 象 者：6年生
4. 講 師：石手 靖
5. 参加者数：39名

II. 幼稚舎体育特別授業

1. 日 程：2018年1月24日（水）
2. 会 場：幼稚舎体育館
3. 対 象 者：6年生
4. 講 師：須田芳正
5. 参加者数：150名

3. 体育会支援

- | | |
|-------|------------------|
| 石手 靖 | 体育会参与 |
| 吉田 泰将 | 剣道部師範、医学部剣道部師範代行 |
| 加藤 幸司 | バドミントン部女子監督 |
| 須田 芳正 | 体育会副理事、サッカー部監督 |

鳥海 崇 体育会副理事
坂井 利彰 体育会副理事、庭球部監督
福士 徳文 ソッカー部コーチ

IV. 業務活動記録

IV. 業務活動記録

2017年度総務分野関係報告

1 人 事

- (1) 就任（新任）
永田直也君（専任講師）
稲見崇孝君（助教（有期））
- (2) 就任（継続）
福士徳文君（助教（有期））
- (3) 主事の交代
黒田修生君から千葉徹君（11月1日付）

2 塾内役職

- (1) 大学寄宿舎舎監
野口和行君
- (2) 大学寄宿舎委員会委員
近藤明彦君
野口和行君
- (3) 大学教養研究センター運営委員
石手 靖君（所長）
- (4) 大学教養研究センター所員
石手 靖君・近藤明彦君・佐々木玲子君・
村山光義君・加藤大仁君・村松 憲君・
山内 賢君・吉田泰将君・野口和行君
- (5) 大学学生総合センター副部長（日吉支部）
村山光義君
- (6) 体育会副理事
綿田博人君（～9月30日）
須田芳正君（10月1日～）
坂井利彰君（継続）
鳥海 崇君（10月1日～）
- (7) 体育会参与
石手 靖君（所長）
- (8) 極東証券寄附講座「生命の教養学」企画委員
村松 憲君（～9月30日）
- (9) 日吉行事企画委員会（HAPP）委員
石手 靖君
- (10) 立科山荘運営委員会委員
野口和行君
- (11) 日吉キャンパス公開講座運営委員会委員
佐々木玲子君
- (12) 日吉記念館運営連絡協議会委員
石手 靖君・加藤幸司君・鳥海 崇君
（9月から）
- (13) 慶應義塾研究倫理委員会研究倫理審査委員会
委員長
佐々木玲子君
- (14) 大学保健管理センター運営委員
石手 靖君（所長）

- (15) 大学スポーツ医学研究センター運営委員
石手 靖君（所長）
- (16) 日吉キャンパス衛生委員
山内 賢君
- (17) HiyoshiResearchPortfolio（HRP）運営委員
石手 靖君（所長）
- (18) HiyoshiResearchPortfolio（HRP）実行委員
村山光義君（～9月30日）
- (19) 通信教育部学務委員
村松 憲君

3 研究所内役職の主なもの

- (1) 所 長
石手 靖君
- (2) 人事委員会委員
石手 靖君・植田史生君・近藤明彦君・
佐々木玲子君・村山光義君・加藤大仁君・
村松 憲君
- (3) 学習指導主任
野口和行君（～9月30日）
村松 憲君（10月1日～）
- (4) 学習指導副主任
村松 憲君（～9月30日）
坂井利彰君（10月1日～）
- (5) 総務委員会委員長
吉田泰将君（～9月30日）
板垣悦子君（10月1日～）
- (6) 教育委員会委員長
野口和行君（～9月30日）
村松 憲君（10月1日～）
- (7) 研究委員会委員長
村山光義君（～9月30日）
須田芳正君（10月1日～）
- (8) スポーツ振興委員会委員長
加藤幸司君（～9月30日）
山内 賢君（10月1日～）
- (9) 将来構想委員会委員長
村松 憲君（～9月30日）
坂井利彰君（10月1日～）
- (10) 活動報告書編集委員会委員長
吉田泰将君

4 その他

- (1) 塾派遣留学について
鳥海 崇君
留 学 先 イギリス
延 長 期 間 2016年10月1日～2017年9月23日
（当初予定：2015年10月15日～2016年9月30日）

（主事 千葉 徹）

Appendix

東京2020大会に向けた取り組み

Appendix

東京2020大会に向けた取り組み

『KEIO 2020 project 2017年度活動報告』

2017年3月、慶應義塾大学は、横浜市・川崎市とともに英国オリンピック委員会（British Olympic Association：BOA）と2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会に先駆け行われる事前キャンプに関する契約を締結した（British Paralympic Association：BPAとの締結については後述）。KEIO 2020 projectは、BOA・BPAのオリンピック・パラリンピックに出場するアスリートが日吉キャンパスに滞在する期間をサポートする学生ボランティア組織として2016年から活動をスタートさせている。本章ではKEIO 2020 projectの2017年度の活動を紹介する。体育研究所では、主として石手靖君、村松憲君、永田直也君、福土徳文君、稲見崇孝がチームとなって学生と向き合い、学生の主体的な活動をサポートしている。

■コンセプト・スポーツボランティア教育プログラム

KEIO 2020 projectは、

- ・選手をベストなコンディションで選手村へ送り出す
- ・横浜市、川崎市とともに地域を盛り上げる
- ・英国文化を受け入れ、日本（文化）の魅力を伝える

以上3点をコンセプトの柱として活動している。繰り返すが、学生主体の組織であることに重きを置いており、体育研究所の教員はその活動をサポートする立場にある。その背景には、2020東京大会へのボランティアとしての関わり方が関係する。2020東京大会へボランティアとして関わりたい場合、大会組織委員会ボランティアと都市ボランティアのどちらかを選択することができる。しかし昨今

のボランティア参加に関する現状は応募した人に必ず参加が約束されるものではなく、履歴書を提出し、面接を経て、合格者だけが参加できる状況にある（2012ロンドン大会では7万人の募集に対し24万人が応募している）。参加の目的は人それぞれにあるが、アスリートに接する機会の多い競技関係や通訳・翻訳の役割には人気があり、希望の役割で大会に貢献できる人は極わずかであり、狭き門といえる。一方で、慶應義塾大学の学生においては、普段の学び舎日吉キャンパスにBOA・BPAのアスリートが滞在するため、アスリートを目にする機会自体はむしろ上述の両ボランティアより多いかもしれない。アスリートと接すること自体はオリンピック・パラリンピックを身近に感じるまたとない機会ではあるが、参加学生個々のモチベーションとはなっても、最も肝心なことはどうやら他にありそうである。大学在学中に大会が開催されることによって、自らが学ぶ大学を拠点としてBOA・BPAをサポートする取り組みを多くの人・組織・企業の力を借りながら自らの力で計画・立案し、組み立て、展開するプロセス、現代を力強く生き抜く“生きる力”をオリンピック・パラリンピックを通じて学ぶことこそがKEIO 2020 projectの真髄はある。これは、上述の両ボランティアへの参加を決して否定するものではなく、自身の大学で行うBOA・BPAとの交流を通じて、大学をどのような大学にしたいかを学生自身が考える契機として捉えていることを意味している。そして大会終了後、慶應義塾大学にどのようなレガシーを残すか？どんなレガシーを残したいか？どういったレガシーを残すべきか？を学生とともに常に考え、種々のスポーツボランティア教育プログラムを計画・立案した【projectアジェンダ ver.1：図1】。その理由のひとつに、日吉キャンパスが複数種目を受け入れる点がある。上述の2017年3月時点で、日吉キャンパスは近代五種、ボクシング、テ

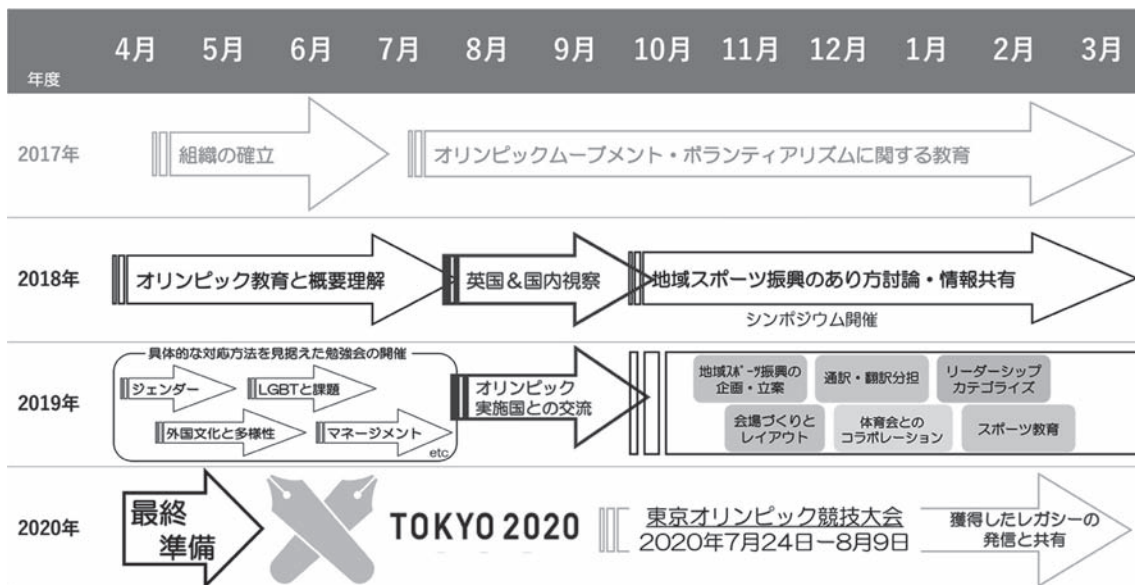


図 1

コンドー、柔道、卓球、ホッケー、ウェイトリフティング、バスケットボール、バドミントン、体操、空手、アーチェリー、フェンシングの13種目を受け入れることが決まっている。本学と同様に、行政と連携して事前キャンプ地の契約を結ぶ他大学の特徴として、体育学部やスポーツ科学部、健康科学部などの体育・スポーツ系専門学部を有している点があり、これらの大学では教養教育を基盤とした専門教育を受講してきた学生がスポーツボランティアを展開する。本学の場合、日吉キャンパスに在籍するのは文学部・経済学部・法学部・商学部・理工学部・医学部・薬学部の一部の学年のみであり、その場凌ぎで行うには限界がある。したがって、中長期的な計画を練って活動をスタートしたわけである。なお、大会組織委員会や各都市が策定するスポーツボランティア教育プログラムの参考にさせていただく機会は大変多いが、ホストユニバーシティとして、また慶應義塾大学として大学の『らしさ』を出すためには、同じプログラムにて進行する必要はなく、上述したように、スポーツボランティア教育プログラムそのものも学生自身によって形を変えるべ

きであるという認識のもと、活動している。本章では、KEIO 2020 project の組織確立に向けた動きや、2017年度に開催したプログラムやイベントなどを時系列にて報告する。

■組織の確立

BOA・BPA サポートに興味のある学生の中からプロジェクトに興味があり、自らがギアとなって運営していくことを希望する学生を募ったところ、2020年を4年生で迎える1年生が多く集まった。KEIO 2020 project 発足当初（2016年夏）から参加している2～4年生数名も加わり、数時間の会議にてKEIO 2020 project の組織を確立した（図2）。図2



図 2

に示したように、興味関心を持ちギアとなって KEIO 2020 project を運営していくことを希望する学生を運営委員とし、運営委員の学生をさらに 5 つの部署に大別した。BOA・BPA とのイベントを見据え各種イベントの企画・運営を主とする企画部、横浜市・川崎市・企業との連携構築を主とする渉外部、塾内外に向けて KEIO 2020 project の活動を発信していく広報部、通訳・翻訳業務を担当する通訳・翻訳部、KEIO 2020 project が資金を抱えた際に予算管理を行う会計部の 5 部署である。経済学部 1 年生の 1 名を KEIO 2020 project のリーダーとして、運営委員の学生はこのどこかの部署に所属して活動する。例えば、企画部が何かをイベントを企画した際には、各部署の代表 1-2 名でグループとなり、イベント当日までの準備をし、役割に沿った活動を展開するというイメージである。情報共有には SNS アプリの『LINE』を活用すること

で学生は頻回にやりとりを重ねた。運営委員の学生らが企画したイベントの当日には、事前に“運営委員ではないものの KEIO 2020 project に興味を持っている学生たち”で構成される LINE グループに情報を呼びかけ、ボランティアとして参加できるように構成した。“運営委員”と“興味がある学生”との間に大きな隔たりを作らないよう配慮した背景には、現運営委員学生らもいずれは三田キャンパスに拠点を移すことになるため、学びのステージが変わり多忙を極めてもいつでも参加頻度・貢献状況を調整できる高い自由度を設ける狙いがある。この組織構成の元、運営委員メンバーが総出となって興味関心のある学生を口コミを中心に募り、月に 1~2 回の頻度で説明会を行い、KEIO 2020 project に参加を希望する学生を募った。月に一度は必ず運営委員会を開催し、それ以外にも運営委員は KEIO 2020 project の魅力を伝えるため

KEIO 2020 project アンケート	
年 月 日	
■あなたのことを教えてください。	
性別 (男・女) 学籍番号 () 学部・現学年 ()	
出身小・中・高等学校 (小学校:) 中学校:)	
(高等学校:)	
留学経験 (無・有 →有の場合:期間: 歳~ 歳頃、国名:)	
いつから本プロジェクトに参加していますか? (201 年 月頃から参加した)	
■以下 3 つの設問にお答えください。なお、空欄行を作ることなく各設問欄の最終行までご自身の考えを記載願います。	
<p>Q1: あなたは東京 2020 オリンピックの BOA ボランティアサポートを通じて、慶應義塾大学の塾生らしく、何をしたいですか? また、何を残したいと思いますか?</p>	<p>Q2: あなたは他者と議論を交わしながら実践していく機会において、重要かつ必要な能力はどのようなものだと考えますか? また、その考えに対して、現時点での自己評価を記載してください。</p>
<p>ver.1</p>	<p>ver.1</p>
1 / 2	2 / 2

図 3

に集まってアイデアを絞り出し、時には夜遅くまでその方法を議論した。その甲斐あってか、2017年度は約50名の学生が運営委員として活動し、254名の学生が興味がある学生としていつでも KEIO 2020 project のイベントに参加できるよう登録した。塾内の動きとしては、BOA・BPA と直接的なやりとりを行なっている塾長室や国際連携推進室と協力し、プロジェクトを進める。なお、体育研究所としては、運営委員メンバーには図3および図4のアンケートへ協力をお願いし、体育研究手法を応用し参加に至った背景と、その変容を追跡する。アンケートは、これまで体育研究所員が一丸となり基盤研究として遂行してきた知見をもとにしており、社会的スキル、自己効力感、ライフスキルの3つの観点から学生の成長を見守っている。全登録者約250名のうち9割以上が1年生(2020年に4年生)であり、9割が女性であることが大きな特徴であった。

KEIO 2020 project アンケート

アンケートへのご協力ありがとうございます。
「学籍番号」は2回目以降の調査の割合にのみ使用しますのでご安心ください。

*1. 学籍番号を入力してください

*2. あなたの性別を教えてください。

男性
 女性

*3. ここから質問が続きます。少し長いので、あまり深く考えすぎずにあてはまるものを教えてください。
では最初の質問です。
「目標は考えるだけでなく、紙などに書き込むようにしている」

ぜんぜんあてはまらない
 あまりあてはまらない
 わりとあてはまる
 とてもあてはまる

*4. プロジェクトのメンバーの前では本当の自分を表現することができる

ぜんぜんあてはまらない
 あまりあてはまらない
 わりとあてはまる
 とてもあてはまる

*5. 悩み事を一人で解決できない時には、誰かに相談するようにしている

ぜんぜんあてはまらない
 あまりあてはまらない
 わりとあてはまる
 とてもあてはまる

図 4

■足跡

1. 『東京五輪音頭 -2020- 神奈川 ver.』の撮影 (2017年10月)

前回の東京大会でも流れた東京五輪音頭の2020年神奈川県版の撮影に参加した。神奈川県知事によれば『パラリンピックの要素を追加した現代版の「東京五輪音頭」の誕生だ。世界に向けて、音頭にのせて、神奈川から「ハッピーアンドピース」をお届けします!』とある。動画投稿サイト Youtube の URL : <https://www.youtube.com/watch?v=CGwZTct4ea0> から閲覧が可能である。神奈川県でオリンピック・パラリンピックに関係のある人・施設が順に踊りながら登場する。KEIO 2020 project のメンバーは動画の 1 分 47秒あたりから 1 分 54秒までに法被を着て登場する (図 5)。撮影当日はあいにく天候が悪く、旧記念館にて撮影が行われたが、取り壊し前の状況がわかる貴重な資料ともなった。ぜひ、ご覧いただきたい。



図 5

2. マナー講習会（図6）（2017年10月）

主として渉外部で活動する学生を対象に、今後活動の幅を広げるために社会に出た際を想定したマナー講習会を開催した。中北薬品株式会社様のご厚意により、福田智子氏（マナーインストラクター）を講師として名刺の渡し方（図7右写真）や、上座・下座の考え方（図7左）、手土産の渡すタイミングなどの実学をご教授いただいた。30名以上の学生だけでなく、教職員も参加する中、和気藹々とした雰囲気の中で講習会が行われた。のち、運営委員の多くは活動の場において名刺を持ち、凛とした立ち回りで先方とコミュニケーションをとっており、講習会の実学が活きている。

そのマナー、正しいと言えますか？

何気なくしているその挨拶・・・
何気なく送信しているそのメール・・・
社会に出てから本当に通用するものでしょうか

参加型マナーアップ研修会のお知らせ

日時：2017年10月26日（木）16時30分～18時
場所：体育研究所2階 会議室
定員：先着60名
（注）10月20日までにKEIO2020projectのgoogleフォームからお申し込みください
持物：筆記用具
講師：福田 智子 先生 マナーインストラクター
資格：2020アンケート提出者

参加費 無料

■講習会の内容（例）と成果

- ・第一印象の良い挨拶の仕方、電話対応、メールの出し方
- ・想定される場面設定によるロールプレイング
- ・projectの対外活動や就職活動対応などに直結する知識の獲得

※本講習会はKEIO2020projectのボランティアメンバーのための企画ですが、教職員の方もご参加いただけます。問い合わせ先の体育研究所までご連絡ください。

主催：KEIO2020projectメンバー（体育研究所） お問い合わせ先：稲見崇孝 (inami@keio.jp)

図6

グループワーク

◆事例検討・ロールプレイ

事前にアポイントを取った企業に、メンバー2名で訪問し、下記のような部屋に誘われました。
受付～名刺交換～面談～退室まで、どのように振る舞いますか？

確認ポイント

- ・ 受付での取次ぎ
- ・ 先方の担当者が部屋に来るまでの立ち居振る舞い
- ・ 手土産を渡すタイミング
- ・ 2対2の名刺交換
- ・ 席次
- ・ 名刺の取り扱い

事例① 応接室



事例② 事務所の一角にある応接セット



図7

3. 防壁パネルアート（2017年11月）

2020東京大会の機運を高めるために、建て替え工事のために記念館まわりに建てられた高さ3mのホワイトバリケード(防壁パネル)へのアートシールを提案した。工程は、連日によるテーマ設定会議ののち、運営委員が中心となって下案を作成し、下案をデジタル化する作業で進んだ。中でもデジタル化する工程を苦手にする学生が多く、体育研究所の教員から手書きの絵を点打ちしてデジタル化するデジタイズ技法を学んだ。日吉キャンパス

の学生のみならず、日吉キャンパスを通行する地域の方にもオリンピック・パラリンピックを感じてもらうために、ルールに関するクイズ形式のパネルや競技で使用する用具・車椅子に関するパネル、パネルの前で写真を撮りSNS拡散を狙ったパネルなど、学生目線でオリンピック・パラリンピックを楽しむためのアイデアが盛り込まれた。約1ヶ月を擁して作成した全38に及ぶパネル(図8)には学部学年を超え多くの学生が参加した。

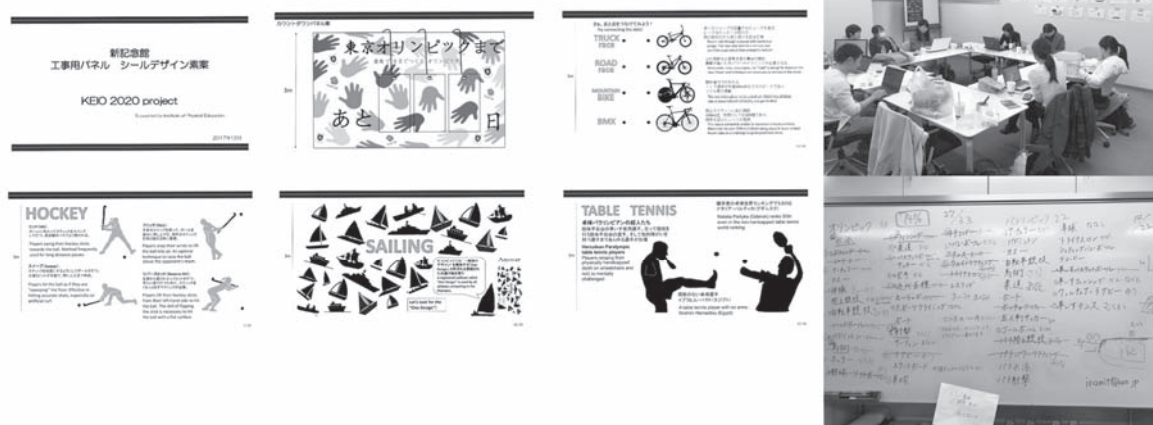


図8

4. プロバスケットボールBリーグ川崎ブレイブサンダースでのボランティア体験（2017年11月）

学生にとって、実際のボランティアはどのように映るのだろうか。トップスポーツ現場でのボランティアを体験すべく、ボランティアのできるフィールドをプロバスケットボールBリーグ川崎ブレイブサンダース様に提供いただいた。学生向けの説明会(図9左上)を塾内で行い、希望者は等々力アリーナで開催されている試合現場にてボランティアの実際を見学し(図9右上と左下)、後日異なる試合のボランティアスタッフを体験した。

5. 横浜市・川崎市との連携（2017年11月～）

運営委員・渉外部の中から横浜市担当・川崎市担当を希望する学生を決定し、今後3ホストで、特にボランティアの面で交流を図っていこうという意図を持ち、まずはKEIO 2020 projectの取り組みについてプレゼンテーションを行った。横浜市市民局オリンピック・パラリンピック推進課、川崎市市民文化局オリンピック・パラリンピック推進室の方々に向けたプレゼンテーションを前に、体育研究所教員にスライドやスライド原稿を何度も添削されながらも完成させ、複数回の発表練習をおこなった甲斐もあり、今後の横浜市・川崎市との取り組みが加速する起点を作ることができた。



図9

6. ポスター制作・体育会とのコラボレーション (2017年12月)

英国チームが慶應義塾大学を視察に訪れた際、施設をみることはあっても、慶應義塾大学にどんなスポーツのチームが存在し、どんな歴史を有しているか、何も知らずに帰国する現状がある。少しでも慶應義塾大学のことを知ってもらうこと、また KEIO 2020 project

のことを体育会のアスリートにも認識してもらうことを目的に、英国チームが興味関心を喚ぶようなポスターの制作に着手した。水泳部葉山部門と弓術部に取材や練習環境の見学などのご協力をいただき、まずは日本語で制作し、添削をいただいたのちに英訳する工程で進めている (図11)。



図11

7. 国立スポーツ科学センター（JISS）見学 （2018年2月）

日本の国際競技力向上に向け、スポーツ科学・医学・情報の分野から支援を行う拠点である JISS を見学した。JISS は、日本オリンピック委員会や各競技団体と連携し、各専門領域の調査・研究を推進するとともに、その成果を踏まえて競技者・指導者等への支援を行っている。英国チームも日本滞在時に活用する可能性もあること、アスリートが普段行うトレーニングや貴重な測定機器・施設に関する知識を獲得することを目的とした。森下義隆氏（JISS 研究員）に施設の案内から説明などすべてに渡るご協力とご配慮をいただくことができ、JISS 内部の食堂（アスリートフード）や宿泊施設の見学が叶った（図12）。

8. 山形県上山市横戸市長と福島県北塩原村 小椋敏一村長による視察（2018年2月）

これまで組織づくりや見学・体験のために出向くことが多かったが、山形県上山市の横戸市長兵衛市長と福島県北塩原村の小椋敏一村長が慶應義塾大学の取り組みと KEIO 2020 project 取り組みを視察された。上山市も北塩原村も2020東京大会において他国の受け入れや交流を計画されており、多くの行政関係者が体育研究所に来館された。プロジェクトのリーダーによる KEIO 2020 project のコンセプトや取り組みについて紹介し、プロジェクトとして協力できることなど意見交換を行った（図13）。



図12



図13

9. ボッチャ体験会の開催（2018年3月）

パラリンピック競技を地域の方へ知っていただくことを目的に、神奈川県と協力し、ボッチャ体験会を実施した。KEIO 2020 project が初めて音頭をとるイベントとなるため、当日までの準備や当日の会場運営などについて勉強するため、システムデザイン・マネジメント研究科教授神武直彦君のご厚意で1月に開催された「かながわパラスポーツ」コーディネーター養成会にスタッフとして参加・勉強させていただいた。本イベントの遂行を担当するグループメンバーが参加し、会場の作り方などについて学ぶことができた（図14上段）。さらに、2月には体育研究所教授村山光義君にボッチャについての歴史やルールなどの座学と自らが体験する機会を提供いただき、当

日参加できない学生もパラリンピックスポーツについて考える起点となった（図14下段）。このように2段階のステップをクリアできたこともあり、当日は満員御礼の大盛況であった（図15）。当日参加された方は地域の障がい者施設の方から一般健常者の方、小学生からご高齢の方まで幅広く、特に会場づくりにおいて、車椅子のタイヤを拭く場所や車椅子の幅を計算して受付を設置し、駐車場から会場までのルート確保、トイレの案内看板等まで配慮する取り組みを行った。ポスターの制作から含めた2ヶ月間は大変良い学びの場であったことと、地域の方との連携を2020年までに強固なものにし準備する必要があることを再認識する機会となった。



図14



図15

10. 通訳・言語サービスボランティア養成講座@上智大学への参加（2018年3月）

上智大学で行われた通訳イベントに主として通訳部の学生が参加した。慶應義塾大学以外の大学も多く参加しており、200名近い学生を対象として2日間のプログラムが開催さ

れた（図16）。初日は座学を中心に、これまでのオリンピック3大会でボランティアをされた方の実際や、1964年東京大会で通訳をされた方の生の声を拝聴することができた。二日目はグループワークが行われ、多様な言語の必要性を認識する機会となった。



図16

■まとめ

図17は留学生向けの大学公式パンフレットの取材風景と当該ページである。上述のように2017年度にいくつかのプログラムを遂行してきた結果が繋がりをみせている。体育研究所がサポートするプロジェクトではあるものの、多くの慶應義塾大学教職員によるサポート、関係企業のご厚意なしに現在はない。多くのご理解とご協力にこの場を借りて、御礼を申し上げたい。詳細については次年度の活動報告書に譲るとするが、2018年4月新入生入学によって、これまで登録していた学生約250名を大幅に上回る約500名の学生がKEIO 2020 projectに興味関心を持ち説明会や会議に主体的に参加し、KEIO 2020 projectに登録した（図18）。2018年4月には、組織再編

に向けた会議が重ねられている。2018年度の活動は、未来先導基金の採択を受け、さらなる飛躍が期待される（採択名：KEIO スポーツレガシー —東京2020オリンピック英国サポートを通じた“生きる力”を備えた人間育成プロジェクト【KEIO 2020 project】代表石手靖君）。塾内のオリンピック・パラリンピック関連専門家との連携を強固なものにし、慶應義塾大学と学生に残る生きる力を備えたKEIOスポーツレガシー構築に尽力したい。スポーツボランティアをするためのプロセスを大切にして、今後も体育研究所は学生をサポートし続ける。

【文責：稲見崇孝】



図 17



図 18

2017年度活動報告書

2018年7月1日発行

[非売品]

編 集：活動報告書編集委員会

板垣 悦子（編集委員長）

奥山 静代 永田 直也

福士 徳文 稲見 崇孝

発 行：慶應義塾大学体育研究所

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

制 作：(有)梅沢印刷所

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45